

長野縣上伊那郡下の開拓地に關する綜合實態調查報告

長野縣立農林專門學校 川 廷 謹 造
栽 培 研 究 室 小 田 切 須 賀 雄 (現長野縣農協指導連勤務)

Reports of Synthetic Investigation on New Cultivated Lands in
Kami-Inagun Naganoken

目 次

I 緒 言

II 調査目的及方法

III 上伊那郡開拓地の概要

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1 開拓計畫の概要 | 4 開拓地の立地條件 |
| 2 開拓予定地の土地所有者の概要 | 5 開拓豫定地が現在まで耕墾外であつた理由 |
| 3 開拓豫定地の地目及利用狀況 | |

III 入 植 状 況

- | | |
|-----------|-------------|
| 1 開拓開始の概要 | 3 脱落者について |
| 2 入 植 状 況 | 4 現在入植者について |

V 開 墾 状 況

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 入植直前に於ける狀況 | 4 開 墾 の 方 法 |
| 2 開墾地の買収進度 | 5 開墾進度と諸條件 |
| 3 開 墾 進 捗 度 | |

VI 開拓農村建設の概況

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 資 金 状 況 | 5 開拓道路の狀況 |
| 2 住宅及共同建築物の建設狀況 | 6 防風林及採草地の設定 |
| 3 用 水 の 状 況 | 7 住宅建築進度と諸條件 |
| 4 電燈引込の狀況 | |

VII 營 農 の 状 況

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1 土地利用度について | 6 地區外水田耕作について |
| 2 農具の導入狀況 | 7 供 出 の 状 況 |
| 3 家畜の導入狀況 | 8 他部落との關係 |
| 4 肥 料 の 状 況 | 9 生活に必要な現金の入手手段 |
| 5 作物栽培の狀況 | 10 營農進度と諸狀況 |

VIII 各開拓地の將來の方針

IX 綜 合 考 察

X 結 言

I 緒 言

開拓事業は言う迄もなく農地改革及協同組合設立と共に戦後直に取り上げられた農業政策の一つである。即ち終戦直後昭和20年11月閣議決定の緊急開拓事業実施要項に示されている通り食糧問題と失業問題を併せて解決すると言う短期的な要請が動機となつたものである。しかしこの要項では開拓事業の持つ長期的な性格及入植後の營農に伴う諸問題が輕視されていた爲事業は期待された様な成果を擧げることが出來ず、昭和22年4月根本方針が変更されて長期的事業の性格に轉換した。即ち同年の決定の緊急開拓事業改訂要項に依れば「國土資源の合理的開發の見地から開拓を行い土地の農業上の利用の増進と人口收容力の安定的増大を圖り以つて新農村の開發に寄與すること」云々とその目的が明示されており、現在これに従つて開拓事業が實施されているのである。

我が國の如く狹隘な耕地に膨大な人口を負擔し且農家の經營面積が細分化の一途を辿りその經營が日々に不安定化しつつある所では耕地の増加は必須の要求であり、又開拓問題が取り上げられたのは必然的な事象である。然し事業が開始されて三年を経過した今日此等の開拓地は如何なる現況にあるだろうか。當初の目的に沿つて順調に發展しているかどうかは甚だ疑問である。

開拓地の現状を見ると必ずしも順調には發展していないのが普通ではあるまいか。又同時に、しかも略同一の各種の自然條件を有し出発しながらその進度が異つているのは如何なる原因によるものであろうか。勿論開拓には常に大きな困難を伴い、又派生的な諸問題が生じて開拓事業の進展を阻害することは言う迄もないが、これ等に對する對策が常に検討されているだろうか。開拓事業を速かに進展さす爲には常にこれ等について検討が加えられ、進展を阻害する因子を除去して行かねばならないのは當然のことである。この様な事は今後新に計畫される開拓地に對してもよい參考資料となるであらう。

開拓地に關する個々の調査又は研究も少くはないが、多くの開拓地を平行的に調査し開拓事業の發展と種々の條件との關係を検討したものは殆んどない。筆者等はこれ等の点を分析しようとして非才を顧り見す地元の上伊那郡下の19箇所の開拓

地についてあらゆる方面から調査を行つて見たものである。この調査が續行され初めて價值のあるものとなると考えるが取り敢えず現在迄のものを茲に報告する次第である。調査の不馴れと調査箇所が多く且項目が多岐に亘つた爲又費用がなかつた爲に多少圖散な点もあると思われるが豫め諒承を得て置く。

II 調査目的及方法、他

この調査は先にも一寸觸れた通り開拓地に生じた個々の問題を取り上げて論じようとする爲のものでなく、むしろ白紙の状態で多くの開拓地を平行的に調査し、そこから種々の問題を抽出しようとするのが目的である。換言すると開拓地の營農の進展を阻害する又は促進する因子を抽出しこれについて詳細な検討を加えようとする予備的なものと考えてもよいのである。これ故この調査によつて直に結論を得ようとするものではなく、結論は引續き行われる調査研究によつて導かれるものであることを諒承願つて置く。

方法は出張聴取調査を主體とし一部地方事務所の資料を參考とした。

期間は昭和23年12月より24年1月に亘る約一ヶ月半に行つた。提示した表はすべて昭和23年12月末現在である。

調査對象には上伊那郡下で緊急要項の適用を受けて事業が開始された集團地10ヶ所小園地9ヶ所合計19ヶ所の純粹入植者による開拓地を選んだ。これ等の地區は大體準高冷地で畑作を主體とするものであつて、大體開拓地の標準になるものと考えたからである。調査地區及存在地は第1表に示す通りである。

第1表 調査對象地區名及所在地

地 名	所 在 地	備 考
集 團 地	一ノ宮	中箕輪町 天龍川西岸台地
	大芝原	南箕輪村 "
	南原	" "
	上溝原	西箕輪村 "
	小黒原	伊那町 "
	木裏原	西春近村 "
	大徳原	赤穂町 "
	飛行場	伊那町 天龍川東岸台地
	場廣	富縣村 天龍川東部山間部
	キグタシ	中澤村 "

小 團 地	中ノ原	南箕輪村	天龍川西岸台地
	北飯島	飯島村	"久保平・横根山・下小段の三ヶ所に分在
	七久保	七久保村	"千入塚・中河原に分在
	針ヶ平(七)	"	"
	針ヶ平(片)	片桐村	"
	三林	七久保村	"
	大源田	上片桐村	"
	柳澤	南向村	天龍川東岸台地

Ⅱ 上伊那郡開拓地の概要

1 上伊那郡開拓計畫の概要(第2表参照)

上伊那郡下で開拓事業實施要項の適用を受けて開拓が計畫されたものは第2表の如く集團地十地區及小團地九地區合計十九地區である。但し第一表にも附記した通り飯島地區は久根平、横根山及下小段の三箇所に、又七久保地區は千入塚及中河原の二箇所に分在しているがこれは便宜上一括取り扱つてゐる。

上伊那郡下に於ける開拓計畫面積は1443.8町歩で、純粹入植1034.3町歩 増反409.5町歩となつて居り増反が約30%を占めている。増反比率は小團地に比し集團地に多く、小團地は増反入植のないところが多い。増反比率の多少は地元の既設農家の耕地面積の多少と大なる關連があり小團地に於ける増反のない所はすべて既設農家が充分な耕地面積を有している所である。増反の多い原因は更に上記耕地面積の多少と云う以外に農村の封建性から外來者の入植を嫌うと云う点が大きい因子となつて居り、成可外來者の入り込みを制限しようとする意識がかなり大きく作用している如く思われる。開拓事業計畫から云えばこの如く増反の多いのは異例であつて望ましい形とは云えないのであろうが立案にあたり地元部落民の感情を多分に折り込まざるを得ないと云うのがその實狀である如く思われる。

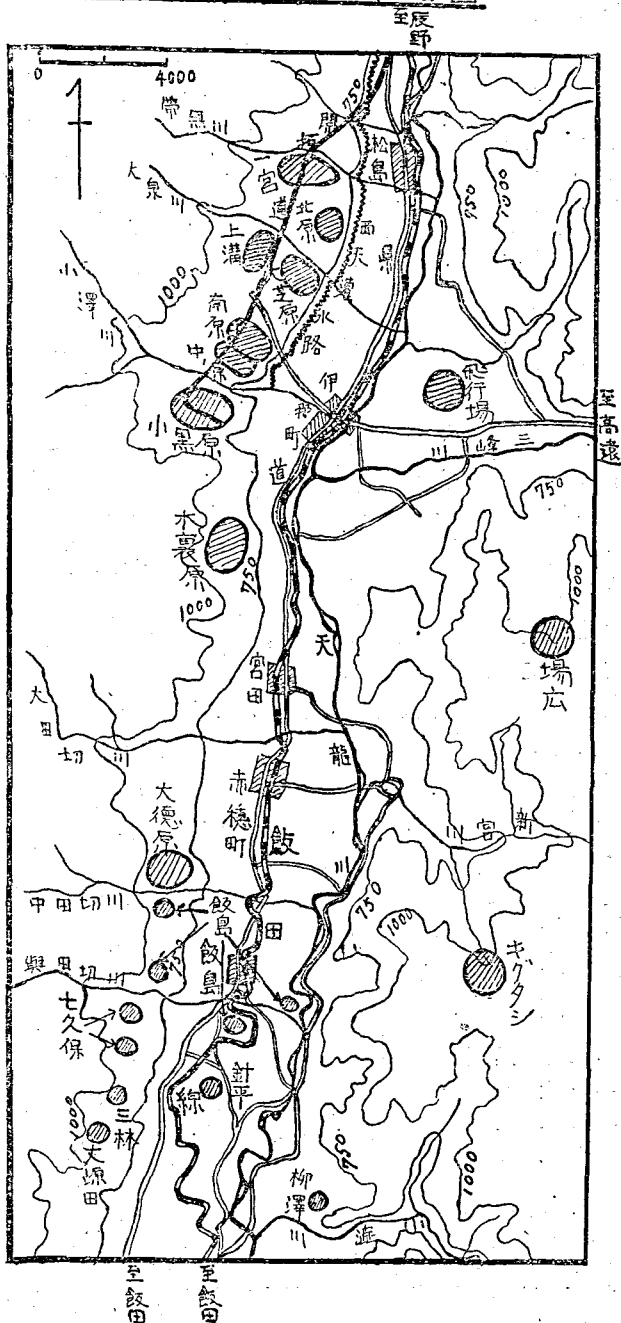
入植農家の戸數はともかくとして一戸當計畫耕地面積は集團地では1.2町~2町平均1.75町歩でこの地帯としてまあ妥當と考えられるが、一般に小團地に於ては稍減少の如くである。即ち小團地では0.71町~1.25町歩で平均1.05町歩であり、どうにか營農が成立し得るか否かの限界にある如く思われ、特に一町以

下の所では營農の安定化は期し難く、これ等の点は考慮されなければならぬ問題である。尙北原の面積の特に少ないのは當初無計畫に入植が行われた事によるものである。

2 開拓予定地の土地所有の概況(第3表参照)

開拓予定地の土地所有の形態を見ると國有は飛行場と云う特例のものがあるのみで他は村有、區有及私有地である。この中私有地が約40%を占め

附圖Ⅰ 開拓地分布略圖



第2表 上伊那郡開拓計畫の概要(地方事務所資料より)

地 區 名		事業開始	計畫入 植戸數	開發計畫面積(町)			同 石 比 率 %			入植一戸當 耕地面積
				地區面積	純粹入植	増 反	總面積	入 植	増 反	
集 團 地	一ノ宮	21年 5月	60	180.0	120.0	60.0	100	67	33	1.2
	大芝原	"	30	91.4	51.0	40.4	100	56	44	1.5
	上溝原	20年10月	90	245.0	200.0	45.0	100	82	18	2.0
	南原	21年 4月	50	100.0	100.0	0	100	100	0	1.5
	小黒原	"	60	205.9	155.9	50.0	100	76	24	2.0
	大徳原	22年 7月	30	112.0	75.0	37.0	100	67	33	1.7
	木裏原	20年10月	54	89.0	70.3	18.7	100	79	21	1.2
	飛行場	21年 1月	10	100.0	25.0	75.0	100	25	75	2.0
場	廣	" 5月	17	57.3	52.5	4.8	100	92	8	2.0
	キグタシ	" 3月	16	72.2	41.0	31.2	100	57	43	2.0
小 計		／	417	1252.8	890.7	362.1	100	71	29	1.75
小 團 地	北原	21年 3月	14	45.0	12.0	33.0	100	27	73	0.71
	中ノ原	" 5月	17	17.8	12.0	5.8	100	63	33	1.0
	飯島	" 12月	12	25.5	25.5	0	100	100	0	1.25
	七久保	22年 4月	12	22.0	22.0	0	100	100	0	1.0
	針ヶ平(七)	20年 7月	17	23.0	14.4	8.6	100	63	37	1.0
	" (片)	21年 4月	18	22.0	22.0	0	100	100	0	1.0
	三林	" 8月	5	16.0	16.0	0	100	100	0	1.2
	丈源田	22年 6月	8	10.2	12.2	0	100	100	0	1.25
柳	澤	21年 3月	8	9.5	9.5	0	100	100	0	1.0
	小 計		／	111	191.0	143.6	47.4	100	75	25
合 計			528	1443.8	1034.3	409.5	100	72	28	1.40

ているが、公私の別から見れば公有地が多い。私有地は後述する如く土地の買収と関係があり、土地の私有が事業の遂行上一つの阻害因子として作用することは明かであり、且これ等の土地が現在まで耕境外におかれていた理由の一つに上げられている。

第3表 開拓予定地の土地所有の状況

(地方事務所より) 単位町

地 區 名		國有地	村有地	區有地	私有地	計
集 團 地	一ノ宮	0	0	180.0	0	180.0
	大芝原	0	81.4	0	10.0	91.4
	上溝原	0	0	147.0	98.0	245.0
	南原	0	0	20.0	80.0	100.0
	小黒原	0	0	0	209.5	205.9
	大徳原	0	0	112.0	0	112.0
	木裏原	0	0	8.0	81.0	89.0
	飛行場	100.0	0	0	0	100.0
場廣	0	0	57.3	0	57.3	
キグタシ	0	72.2	0	0	72.2	
小 計		100.0	153.6	524.3	474.9	1252.8

小 團 地	北原	0	0	0	45.0	45.0
	中ノ原	0	10.0	7.8	0	17.8
	飯島	0	23.5	0	2.0	25.5
	七久保	0	22.0	0	0	22.0
	針ヶ平(七)	0	0	0	23.0	23.0
	" (片)	0	0	0	22.0	22.0
	三林	0	16.0	0	0	16.0
	丈源田	0	0	0	10.2	10.2
地	柳澤	0	0	0	9.5	9.5
小 計		0	71.5	7.8	111.7	191.0
合 計		100.0	225.1	532.1	586.6	1443.8
比 率 %		7	16	37	40	100

3 開拓予定地の地目及利用状況(第4表参照)

開拓予定地として計畫された所は山林が多く約85%を占めている。これ等は山林と云つても平地村であつて樹種の大部分は30~40年の赤松又は25~30年生の檜である。これ等の土地は一般に「原」と稱せられていて、大正初期までは所謂刈敷林及採草地として利用されていた所で金肥の出廻りと

共に植林され育成されたものである。公有のものは薪又は用材として公共の財源にされ、又下草は一般に公開され比較的既有部落に近い所からその存在價值も相當高く評價されていたものである。私有のものもその利用は同様であるが、小作人のみが對象であつた所が異つてゐる。原野となつて

ゐるのは亂伐の結果であつて採草地として利用されていたものである。

又表には特に示さなかつたが、未墾地は92%で8%は所謂二荒地と云われる所のものであり、飛行場の外にキクダシに水田一反歩跡及片桐針平及丈源田に夫々約10町歩の畑地跡がある。

第4表 開拓予定地の地目及利用狀況(地方事務所資料及聴取)

地 區 名				總面積	山 林	原 野	其 の 他	利 用 狀 況
集 團 地	一ノ宮	芝原	溝原	180.0	180.0	0	0	薪炭林(赤松)
	大芝	上溝	南原	91.4	91.4	0	0	同 上(赤松・ヒノキ)
	上溝	南原	黒原	245.0	220.5	24.5	0	同 上(赤松) 採草地
	南原	黒原	徳原	100.0	100.0	0	0	同 上(赤松・ヒノキ)
	小黒	大徳	木裏	205.9	205.9	0	0	同 上(赤松・ヒノキ)
	大徳	木裏	飛行場	112.0	112.0	0	0	同 上(赤松)
	木裏	飛行場	廣	89.0	89.0	0	0	同 上(赤松)
	飛行場	廣	グダシ	100.0	0	0	100.0	飛行場
小 團 地	グダシ			57.3	0	57.3	0	採草地
	グダシ			72.2	72.2	0	0	同 上(カラ松・赤松)
	小計			1252.8	1071.0	81.8	100.0	
	北原	ノ原	飯島	45.0	45.0	0	0	薪炭林(赤松・ヒノキ)
	中ノ	飯島	久保	17.8	17.8	0	0	同 上(赤松)
	飯島	久保	ケ平(七)	25.5	2.5	23.0	0	同 上(赤松) 採草地
	七ケ	平(七)	片	22.0	22.0	0	0	同 上(赤松・ヒノキ)
	針ケ	平(七)	片	23.0	23.0	0	0	同 上(雜木)
地	林	源田	澤	22.0	11.0	11.0	0	同 上(雜木) 採草地
	三上	源田	澤	16.0	16.0	0	0	同 上(ヒノキ)
	柳	源田	澤	10.2	10.2	0	0	同 上(赤松・ヒノキ)
	柳	源田	澤	9.5	9.5	0	0	同 上(ナラ・クヌギ)
	小計			191.0	157.0	34.2	0	
合 計				1443.8	1228.0	115.8	100.0	
比 率				100.0	84	9	7	

4 開拓地の立地條件

(i) 地理的環境 地理的環境は將來營農の形態を決定する一つの要素になるからして之に就いて上伊那郡下の各開墾地を見ると次の如くである。

(附圖1)

中部地區天龍西岸台地の開拓地 (一ノ宮, 北原, 大芝原, 上溝原, 南原, 中ノ原, 小黒原) 天龍川沖積地帯の部落と木曾山麓地帯の村落の間に一連となつて点在する開拓地である。交通的位置は山麓地帯の村落より優れて居り、何れもこの地帯の主要通路線である。國鐵飯田線最寄驛に50~80分の距離にあり、道路はよく発達している。

飛行場跡開拓地 (飛行場) 四圍を村落で圍まれて居り、國鐵高遠線に近く又徒歩でも約30分であり、道路もよく発達している。經濟的には伊那町を控えて郡下開拓地中最も優位にある。

東部山間地帯の開拓地 (場廣, キクダシ) これは郡下開拓地中最も恵まれない所であつて場廣は前記高遠線美簔驛より徒歩約2時間、キクダシは信南バス赤穂中澤線の終点から約1時間10分を要し何れも道路悪く牛馬車以上は交通困難な林道が一本通じているのみである。共にその地帯で最も僻地であり場廣は約200米下まで耕地が伸びて來てゐるがキクダシの場合は既存部落及耕地より約

1 軒離れた盆地狀地區である。

南部地區天龍西岸台地の開拓地（木裏原，大徳原）この地區は大體木曾山麓に近く既存部落と一連の線上にあつて道路はよく発達し飯田線最寄驛より歩いて約30分で既存部落と交通的地位は變りはない。

南部山麓地區開拓地（飯島，七久保，三林，大源田）何れもその村として標高の最も高い山麓地帯にあり村の中心部とは相當離れているが飯田線最寄驛より30～40分であり交通的には既存部落に比しそう悪い所ではなく，又トラックの通り得る道路も存在している。

針ヶ平開拓地區（七久保針ヶ平，片桐針ヶ平）四周部落に圍まれており飯田線七久保驛より歩いて10～20分の距離で交通的には本部開拓地中最優位にある。

柳澤開拓地（柳澤）飯田線伊那田島驛より徒歩にて約1時間，天龍川東部の山麓地帯と天龍沖積地帯の中間にある。交通的地位はあまりよくないがトラックの通う道路はある。

以上要するに地理的經濟的位置は上伊那郡の開拓地の場合は東部山間地帯の場廣，キクダシを除いて一般に既存の部落と全々交りはないと云つてよく，又殆んどが同一條件下にある。

(ii) 自然環境（第5表，第6表参照）

概括すると一般に山麓高原農業地帯に屬すると

見てよい。開拓地基準により選定された所であるが細部を述べると次の様である。

標高 針ヶ平地區を除いて何れも700米以上でありその大部は所謂準高冷地から高冷地帯に入るものであり，東部山間地區は950～1,100米で高冷地帯に屬している。

無霜期間 気温の資料が得られないので農業上作物栽培に最も關係の深い無霜期間を調査した。その結果は東部山間地區は150日，中部地區天龍地西岸台地では155日，飛行場及南部天龍西岸台地では165日，南部山麓地區及柳澤では165～170日，針ヶ平は180日となり，標高及び緯度の關係が明かに示されている。又の初霜の時期の差より晩霜の差が大きく春作の作付に對する影響の方が大きいと考えられる。

降雨量 大體中部地區より南部に向い1150耗～1600耗の開きを示し南部に行く方が降雨量が多くなつてゐる。一般的に見ると降雨量は多い方ではなく，又降雨量の年間分布が一樣でないで屢々旱害を被ることがある。

地形 飛行場の如く特例なものを除き一般には緩傾斜地であり傾斜度は5°～10°が多く甚しいのは場廣の15°～20°がある。天龍川西岸のものは大體東西又は東南面傾斜であり大體一樣であるが東部山間部の場廣は北面傾斜であつて恵まれず，又柳澤地區の西面傾斜が異つてゐる位である。

第5表 上伊那郡開拓地の自然環境 I 氣象條件

地 區 名			標 高	初 霜	晩 霜	無霜期間	年間雨量
集 團 地	一ノ宮		780~ 870	10 月 中旬	5 月上中旬	155	1142
	大芝原		770~ 800	"	"	"	1323
	上溝原		800~ 900	"	"	"	1152
	南原		750~ 850	"	"	"	1378
	小黒原		750~ 850	"	"	"	1378
	大徳原		750~ 880	10月中下旬	5 月 上 旬	165	1408
	木裏原		680~ 730	"	"	"	1304
	飛行場		700	"	"	"	1185
	場廣		980~1100	10 月 中旬	5 月 中 旬	150	1249
キグダシ		950~1100	"	"	"	1274	
小 團	北原		750	10月 中 旬	5 月上中旬	155	1142
	中ノ原		750~ 840	"	"	155	1378
	飯島		750~ 850	10月中下旬	5 月 上 旬	165	1617
	七久保		750~ 900	"	4 月下旬— 5 月上旬	170	1617
	針ヶ平(七)		600~ 650	10月 下 旬	4 月 下 旬	180	1370
	"(片)		580~ 600	"	"	180	1370

地	三	林	880~ 890	10月 中 旬	4月下~5月上旬	165	1543
	丈	源	750~ 800	"	"	165	1543
	柳	沢	720~ 750	10月中下旬	"	170	1126

註、溫氣は資料が乏しく除外す。聴取及最寄小學校記録より

上旬は5日、中旬は15日、下旬は25日を中心とす

地質及土性 地質も東部山間地帯の場廣及キグ
タシ夫々片麻岩、花崗岩を除き洪積層であり、土
壤も大體腐植に富む黒色壤土である。飛行場の場合
は表土が削り取られた爲に褐色埴壤土となつて
居り一般的にこの地帯から云えばB層が露出した
ものである。その他砂質のところが一、二あるが
殆んど各地とも変らない。又この地帯の土地は一般
に火山灰質であり、この点も各地區とも共通である。
従つて酸度は極めて強く、最も弱い所で、
PH 5.0~5.5であり、PH 5以上の所は極く一部
に限られて居る。又磷酸の吸収係数が大で強酸性
磷酸欠が共通の事實であり、これが初期における
作物の導入と施肥方法に大きな影響を與えることは
云うまでもないことである。

地下水位 地下水位は極めて低いものが多いが
大抵は少くも30尺以上である。特に中部地區大龍西
岸台地及飛行場に甚しく40~60尺以上となつてい
る。一番高いものはキグタシ、七久保の約10尺で

あるが、他の地區では一般に地下水が低く用水を
得るに困難である。

以上を概括すると一般自然條件は附近に既存部
落が多く営農が行われている所からして特に之ら
の地帯が不利であると言う点は見出されない。但
し場廣及キグタシは稍不利な條件下にある。土壤
の問題も熟畑化しているか否かの問題で何れの所
でも営農初期には相當問題があつたと考えられこ
れ等の開拓地のみの問題ではない。

唯一つ大きな問題は水である。これ等の開拓地
區の多くは水を得ることが出来ない爲現在まで村
落が発達しなかつたと考えられる地帯にあり、こ
の点が上伊那郡下の多くの開拓地の自然條件の中
最も欠点であり、且営農上大きな障害となるもの
であり、水の解決が今後の成否を決する大きな要
因になるであろうことは察するに難くはないので
ある。

第6表 上伊那郡開拓地の自然環境 II (土壤關係)

地 區 名	地 質	地 形	土 性	地下水位	PH
集 團 地	一ノ宮	洪積層	東面傾斜	60~70尺	4.0~4.2
	大芝原	同	概ね平坦	70~80	同
	上溝原	古生層	東南面傾斜起伏多し	100~120	同
	南黒原	洪積層	東面稍傾斜	70~90	4.0~4.4
	小徳原	同	東面傾斜	40~50	4.0~4.6
	大裏原	同	同	30	4.0~4.2
	木飛場	同	同	50	4.0~4.6
	飛行場	同	平 坦	120	4.0~5.2
小 團 地	キグタシ	片麻岩	北面傾斜	30	4.0~4.2
		花崗岩	東南面傾斜	10	4.0~4.2
	北原	洪積層	概ね平坦	40~60	4.0~4.2
	中ノ原	同	東南面稍傾斜	70~90	4.0~4.4
	飯島	—	—	—	—
	(久根平)	同	東北面傾斜	30	4.0~4.5
	(横根山)	同	東南面傾斜	36	5.0~5.5
	(下小段)	沖積層	東北面傾斜	6	4.5~5.5
	七久保	—	—	—	—
	(千人塚)	洪積層	東面傾斜	6~12	4.0~5.0
	(中ガ原)	同	同	6	4.5~5.5
	針ヶ原(七)	同	東面傾斜起伏多し	36	4.0~4.2

同	(片)	同	同	同	30~ 36	4.0~4.6
三	林	同	東面傾斜	埴質壤土	36	4.0~4.5
大	源	同	同	砂質壤土	40	4.0~4.5
柳	澤	同	西面傾斜	褐色壤土	30~ 40	5.0~5.4

註・長野縣農試「開拓地土性調査」及出張調査による

5 開拓予定地が耕境外に於かれていた理由

(第7表参照)

上述の開拓予定地が事業要項の適用を受けて解放されたのであるがこれ等の地區が現在まで開墾されなかつた原因について一寸觸れて見たい。

大体土地が耕境外に於かれる原因を大別すると自然的條件と社會的條件に別けられる。自然的條件の主なるものには氣象、地形、地力、及用水等が考えられ、又社會的條件には位置、土地所有の形態、耕地以外のものとしての利用價值及その地方の農家の経営面積の大小と云う如きものが考えられる。上伊那郡の場合は既に述べた通り氣象、地形は問題とならず、自然條件では用水及地力が主要であり、社會的條件はその地區毎に特殊なものが作用していると考えられる。これ等の調査の結果をまとめて見ると第7表の如くなる。これに依ると用水關係が12件で最大であり、所有關係が9件、耕地以外への利用が9件で之についている。耕地以外への利用の場合は全部が公有の場合であるので之も所有關係にまとめると18件で最大になる。他は小數で問題にはならないから大きな要因としては水の問題と所有關係に歸一することが出

來るのではないかと云うことが云える。

之から見ると水のないと云うことが耕地化を阻害していた要因であり、農業経営と水と云う問題は極めて重要であることがこゝにも明かに示されるのである。上伊那郡下の開拓地にはこの用水と云う條件に欠けている所が大部分であるから計畫者はこの問題を如何に解決するかと云う事を常に念頭に置き努力しなければ開拓地の將來は決して明るいものとは云えないであらう。郡下では開拓地に關してはまずこの問題を解決することが第一の課題と云える。

土地所有の形態が耕地化を阻害していると云うことは既に多くの人々によつて叫ばれている所であるからこゝでは繰返す必要のない所であるが、國內の耕地の現況からしても更に強力なる解放が望しいと考えられる。公有地の場合の解放は比較的容易であるが私有地の場合は現在猶多くの困難が伴つて居り、又解放したと云つてもその後の事業の進展に伴い色々と派生的な問題を生じ易くこの点國家の更に強力な處置を必要とするのではないだろうか。

第7表 開拓予定地が耕境外に置かれていた理由

地 名	用水條件	地力條件	所有關係	耕地外への利用價值	交通上位置	経営面積が大きく開墾の必要なし
一ノ宮	○		個人所有	公有薪炭林として		
北ノ原	○			同		
中ノ原	○			同		
大芝原	○			同		
上溝原	○		同			
南原	○		同			
小黒原	○		同			
飛場廣	—	—	—	—	—	—
場		○	三村所有		○	
キグダシ				村有林として	○	
木裏原	○		個人所有			
大徳原	○	○		公有薪炭林として		○
飯島				採草地として		○
七保				村有林として		○
針久平	○	○	同			
三林	○			同		

大 柳	源 田 沢	○	○	同 同			
合	計	12	4	9 (個人8)	9	2	3

註. 飛行場は以前畑地であつた爲除外す
針ヶ平は一括とり扱つた

Ⅲ 入植状況

1. 開拓開始の概要

最も早く始められたのは七久保針平地區で昭和20年1月より農地開発營園により45町歩を目標に計畫され同年7月第一回の入植が行われた。其の後事業要項の適用を受けて同22年10月買上となつた。又飛行場は終戦後直に伊那町津村研究所（現在なし）により開墾が行われ、又上溝原及木裏原は昭和20年10月から開始され其の後事業要項の適用を受けたものである。其の他は當初より事業要項に基き計畫開始されたものである。それ故上述の地區とその他の地區では土地開放の意識が若干異つて居り、これが開拓の進捗にも相當の影響を與へている如くである。

各開拓地では開拓事業を圓滑に進める爲入植當時に任意の組合（始めは開拓歸農組合、現在は開拓協同組合と云い不出資の組合である）を組織されている。しかし開拓事業の主體は必ずしも組合でない場合があり地區によつて異つている、これを分類すると次の如くである。

(イ) 村の協同組合が主體 柳澤

(ロ) 村の役場が主體 七久保、大源田、三林
西針ヶ原、大芝原

(ハ) 開拓組合が主體 其の他の地區

開拓事業は始めは集團では全額、小園地では一部國庫負擔で開始されたが昭和23年4月より個人單位の補助金制度に変更された。

2 入植状況

1 現況（第8表参照）目的は純粹入植者を對象とした調査であるが、種々の關連もあるので増反の分も示した。これによると純粹入植率は全計畫の93%に對し増反者は108.5%を示し増反者の進出が著しい。特に集團地に於て著しいのは一般に小園地の場合は地元の農家の経営規模が比較的大であるに比し、集團地の如く大面積の耕地化が遅れていた所ではやはり地元の経営規模が少いからだと思われる。この傾向は一ノ宮及木裏原地區に

特に著しく、一般に増反者が純粹入植の計畫面積を浸蝕する傾向がある。特に増反の場合は純粹入植の場合に比し一應經濟的基礎を持つてゐるから事業は有利であり、又加うるに純粹入植者の開墾は遅れがちである爲之に乗じて純粹入植地區まで浸蝕する傾向が屢々見られる。この著しい例は其の後の調査に見られる上溝原がある。又地元民の排他的な因習からして増反者の浸蝕を稍大目で見ると云うことが行われていることも事實である。

第8表 各開拓地の入植状況（23年12月現在）

地 區 名	純 粹 入 植			地 元 増 反		
	計畫	實績	比率	計畫	實績	比率
集 團 地	一ノ宮	戸 60 58	96.7	戸 140 300	214.4	
	大芝原	戸 30 30	100.0	戸 240 200	87.3	
	上溝原	戸 90 88	97.8	戸 220 200	90.9	
	南 原	戸 50 44	88.0	戸 ? ?	—	
	小黒原	戸 60 51	85.0	戸 250 250	100.0	
	大徳原	戸 30 28	93.3	戸 40 25	62.5	
	木裏原	戸 54 53	98.1	戸 30 100	333.3	
	飛行場	戸 10 10	100.0	戸 350 346	98.8	
	場 廣	戸 17 17	100.0	戸 14 14	100.0	
	キグタシ	戸 16 14	87.5	戸 33 31	93.9	
小 計	417	293	94.3	1317	1466	111.3
小 園 地	北 原	戸 14 14	100.0	戸 ? ?	—	
	中ノ原	戸 17 10	58.8	戸 30 10	33.3	
	飯 島	戸 12 11	91.7	戸 0 0	—	
	七久保	戸 12 11	91.7	戸 0 0	—	
	針平(七)	戸 17 13	91.7	戸 63 46	73.0	
	針平(片)	戸 18 18	76.6	戸 0 0	—	
	三 林	戸 5 5	100.0	戸 0 0	—	
	大源田	戸 8 8	同	戸 0 8	800	
柳 澤	戸 8 8	同		戸 0 0	0	
小 計	111	98	88.4	93	64	68.8
合 計	528	491	93.0	1410	1530	108.5

純粹入植の状況は割合良好であつて集團地では總て85%以上、小園地では特別を除き91%に上を示している。又100%を示しているものが全體で七ヶ所ある。一廣すべての入植は100%行われた

が脱落者が出た爲現況の如くなつたのであり、小園地入植戸数が少い關係上入植がうまく行われると云うことを考慮すれば小園地の率が高くなつてゐるのは當然である。小園地の特例として中の原58.8%及七久保針ヶ平の76.6%であるが中の原の場合はすべて農業の未経験者が入植して居り、針ヶ平の場合は特に地力が低く開墾も最も困難な地區である爲の結果であると思われる。

ii 入植の年次別進捗経過(第9表)

入植年次別進捗を見ると開拓初年次に最高率を示す場合が一番多く集團地では八ヶ所、小園地では七ヶ所に於て之が見られる。そして木裏原と場廣を除きその計畫戸数の大部分が初年次に入植し又小園地では計畫戸数が少ない關係上殆んど100%を示している。二年目に最高率を示す所は集團地では大芝原、上溝原、小園地では片桐針ヶ平である。この中上溝原は入植開始が年末に近かつた

關係と見られ、木裏原の初年次に最高率を示すがその比率があまり高くないと云う事と同様理由によると考えられる。針ヶ平の場合は土地の關係であり場廣の場合同様でないかと思われる。

其の他三年間殆んど同率で入植しているのは七久保針ヶ平であつて土地の關係が主なる原因であろう。又これ等の地區では私有地が多いから土地所有の状態も関連していると思われる。唯大芝原の場合のみこれらの理由にあてはまらないが、大芝原は集團地中事業主体が役場で行われている唯一の所ではないかと思われる。

要するに上伊那の場合は大体初年次に最高率の入植を示しているのが一般的の傾向であつて、そうでない場合にはその土地での特殊な條件がこれを阻けたと見るべきである。これ等には土地買収地力、特に開墾の困難、人選及その村の方針と云う如きものが含まれるであろう。

第9表 年次別入植者數及脱落者數(23年12月末)

地 區 名		入植 開始	年次別入植戸數					年次別脱落者數					脱 落 率	現在入 植戸數	計 畫 戸 數	
			20	21	22	23	計	20	21	22	23	計				
集 團 地	一ノ宮	21年5月		50	25	8	83		0	23	2	25	30.5%	58 ^戸	60 ^戸	
	大芝原	同		9	20	4	83		0	0	3	3	11.0	30	30	
	上溝原	20.10	24	53	9	4	90	0	0	2	0	2	2.2	88	90	
	南原	21.4		46	3	2	51		0	6	1	7	13.7	44	50	
	小黒原	同		55	23	0	78	18	9	0	0	27	34.6	51	60	
	大徳原	22.7			22	6	28			0	0	0	0	28	30	
	木裏原	20.10	33	22	0	0	55	0	0	0	2	2	3.6	53	54	
	飛行場	21.1		10	0	0	10		0	(1)	0	0	0	10	10	
小 園 地	場廣	21.5		10	0	9	19		0	2	0	2	10.5	17	17	
	キグタシ	21.3		14	5	0	19		0	5	0	5	26.3	14	16	
	小 計			57	269	107	33	466	0	18	47	8	73	15.7	393	417
	北原	21.3		14	1	1	16		0	1	2	2	12.5	14	14	
	中ノ原	21.5		17	0	0	17		0	7	0	7	41.2	10	17	
	飯島	21.12		12	0	0	12	0	0	1	0	1	8.3	11	12	
	七久保	22.4			11	1	0			1	0	1	8.3	11	12	
	針ヶ平(七)	20.7	4	3	5	1	13		0	0	0	0	0	13	17	
小 園 地	同(片)	21.4		6	12	0	18		0	(2)	0	0	0	18	18	
	三林	21.8		5	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5	5	
	大源田	22.6			9	0	9			1	0	1	11.1	8	8	
	柳沢	21.3		8	0	0	8		0	0	0	0	0	8	8	
小 計			4	65	37	3	109	0	0	10	2	12	10.1	98	111	
合 計			61	334	144	36	575	0	18	57	10	85	14.6	491	528	

註 ()は保留中

3 脱落者について(第9, 10, 11表参照)

脱落者は相當高率を示している。集團地の方が小園地に比して多いのは戸数の多少による適格者の選抜の難易が大きな理由になるであろう。中に開拓以外の目的を以て名目上の入植者に名を連ねたと云う特殊なものを除いて脱落率の高いのはキグタシと中ノ原であるが共に入植者に農業未経験者が多かつた爲とキグタシの場合地理的に見て生活面に非常に不便な場所であると云うことが原因ではないかと思われる。脱落は開拓二年目に多いが脱落理由からしても一年やつて見て堪え得なくなつたと考えられるから當然の事であろう。脱落の理由は第10表に示す如く意志薄弱と考えられるものが最も多く經濟困難がこれに續いている。

第10表 脱落の理由(地區別)(23年12月末)

地區名	意志薄弱	病氣	家庭事情	資金不足	名目上参加	計
集 團 地						
一ノ宮	1	0	1	0	23	25
大芝原	1	0	1	1	0	3
上溝原	2	0	0	0	0	2
南原	4	0	3	0	0	7
小黑原	4	0	0	0	23	27
木裏原	0	1	0	0	1	2
飛行場	0	0	(1)	0	0	(1)
場廣	2	0	0	0	0	2
キグタシ	2	1	0	2	0	5
小 計	16	2	5	3	47	73
小 園 地						
北原	0	0	0	2	0	2
中ノ原	3	0	0	4	0	7
飯島	1	0	0	0	0	1
七久保	1	0	0	0	0	1
針ヶ平(片)	(2)	0	0	0	0	(2)
大源田	1	0	0	0	0	1
小 計	6	0	0	6	0	12
合 計	22	2	5	9	47	85

脱落者のない地區は省署()は保留中、計には算入せず

名目上入植と云うのは開拓地に於て営農を行う意志なくこれを利用して何かの事業を行うことを目的としたか(一ノ宮の場合は松根油の採取)又土地の確保(小黑原)其の他を目的としていたものであり、これは嚴密な意味では開拓脱落者と云えない。脱落理由と前歴の關係(第11表)を見ると農家の子弟が以外な高率を示している。特に意志薄弱で脱落したものの率が高いことは一考させられる所である。これ等の人々はもともと出來得れば

農業はやりたくないが止むを得ず入植したと云うのが現實であろう。これ等から見ると既に云われていることではあるが開拓適格者は経験有無よりも意志の鞏固であること云うことが第一條件であることが明らかに示されているわけである。

第11表 脱落者の前歴と脱落理由(23年12月末)

理由	前歴	農業	工員	商業	社會員	日傭	職練	戰災	引揚	不明	計
意志薄弱	15	0	2	1	0	1	2	1	0	22	
病氣	(2)	0	1	0	0	0	1	0	0	2	
家庭事情	3	0	1	0	0	0	(1)	0	1	5	
資金不足	2	1	0	0	2	0	3	1	0	9	
名目參加	1	0	0	0	0	0	0	0	46	47	
計	21	1	4	1	2	1	6	2	47	85	

註()は保留 計には算入せず

4 現在入植者について

次いで入植者について人員、出身地及前歴に就き簡単に述べて置く。

性別及可働人員率について(第12表参照)

現在入植人員は1734名で男915名女819名、性比は0.89である。一戸當り人員は平均3.58名となっている。一戸當人員は集團地より小園地に多い。可働人員は957名で總人口對比58.2%を示し、一戸1.98名となり又性比は0.74となつてゐる。之に於ても小園地の方が一般に集團地より高い。可働人員率の高いところでは大芝原、小黑原、飛行場場廣、キグタシ、北原、三林、片桐、針ヶ平が60%に上を示し、低いのは一ノ宮の45.6%、飯島の49%である。

一戸當人員の多少、可働人員率及その性比等から見てその地區の入植者に獨身が多いか又は家族を持つものが多いかと大体判定され、一般には一戸當人員が少なく、可働人員が多く且その性比の低い所では獨身の入植が多いと見てよい様である例は大芝原の如きはそのよい例である。

又年令別は地方事務所の23年6月調査によれば21~60才が856名で最も多く、営農の中心であるので當然であるが、15才以下がこれに次いで567名を示し、割合年少者が多いことを示し、又60才以上31名と云う數字が出て居る。

入植農家経営主の學歷(第13表参照)

學歷は高小卒が殆んどで88%をしめ、旧制中學卒が9%、高専以上は3%弱で問題にならない。高専以上の人々は引揚戦員などで一家で擧げて入植

第12表 入植人口一覽表 (23年12月末)

地 區 名		現入 任植 戸數	現 在 人 口				可 働 人 口				總人口に 對する可 働人口率 %	男 子 の 比
			男	女	計	一戸當 人 員	男	女	計	一戸當 人 員		
集 團 地	一ノ宮	58	148	161	309	5.3	80	16	141	2.4	45.6	0.76
	大芝原	30	40	16	56	1.9	32	11	43	1.4	76.6	0.33
	上溝原	88	180	132	312	3.6	85	72	157	1.8	50.3	0.89
	南原	44	74	53	127	2.9	51	22	73	1.7	57.4	0.43
	小黒原	51	86	91	177	3.5	60	57	117	2.3	66.2	0.95
	大徳原	28	61	56	117	4.2	30	29	59	2.1	50.5	0.97
	木裏原	53	93	89	182	3.4	62	37	99	1.9	54.4	0.59
	飛行場	10	21	13	34	3.4	13	8	21	2.1	61.8	0.61
地	場 廣	17	24	13	37	2.8	17	6	23	1.4	62.1	0.35
	キグタシ	14	26	18	44	3.1	17	11	28	2.0	63.5	0.64
小 計		293	753	642	1395	3.55	447	314	761	1.94	54.6	0.70
小 集 團 地	北 原	7	12	13	25	3.6	9	7	16	2.3	64.0	0.77
	中ノ原	10	23	16	39	3.9	13	9	22	2.2	56.5	0.69
	飯 島	11	16	33	49	4.5	11	13	24	2.2	49.0	1.18
	七久保	11	17	29	46	4.2	12	11	23	2.1	50.0	0.91
	針ヶ平(七)	13	25	26	51	3.9	17	11	28	2.2	54.9	0.65
	同 (片)	18	30	27	57	3.2	20	21	41	2.3	72.0	1.05
	三 林	5	9	6	15	3.0	5	5	10	2.0	66.7	1.00
	大源田	8	14	12	26	3.3	10	5	15	1.9	57.7	0.50
地	柳 澤	8	16	15	31	3.9	8	9	17	2.1	54.9	1.12
	小 計	91	162	177	339	3.72	105	91	196	2.15	57.9	0.86
合 計		484	915	819	1734	3.58	552	405	957	1.98	55.2	0.74

※ 北原は開拓組合を組織している入植農家のみにつき調査

第13表 入植者経営主の學歷別一覽 (23年12月末)

地 區 名			高小卒	中卒	専卒	大學卒	計
集 團 地	一ノ宮	51	1	1	2	58	
	大芝原	28	2	0	0	30	
	上溝原	77	7	3	1	88	
	南原	39	5	0	0	44	
	小黒原	40	10	0	1	51	
	大徳原	25	3	0	0	28	
	木裏原	53	0	0	0	53	
	飛行場	5	4	0	1	10	
場 廣	17	0	0	0	17		
キグタシ	14	0	0	0	14		
小 計			352	32	4	5	393
小 集 團	北 原	0	6	1	0	7	
	中ノ原	10	0	0	0	10	
	飯 島	10	1	0	0	11	
	七久保	10	1	0	0	11	
	針ヶ平(七)	11	1	0	1	13	
	同 (片)	17	1	0	0	18	

地	三 林	5	0	0	0	5
	大源田	7	0	0	1	8
	柳 澤	6	1	0	1	8
小 計		76	11	1	3	91
合 計		428	43	5	8	484

※ 北原は開拓組合を組織しているもののみにつき調査

しているものが全部である。之等は特にその人に指導能力がある場合は事業発展に影響する所が大きいが普通は殆んど影響はない様である。

入植者の前歴及農業経験の有無(第14表、第15表参照)前歴は普通及び開拓移民を加えて引揚者が最も多く其の他戦災、復員、農家分家及轉職が畧同率である。地區的には相當差異はあるが事業の進捗にそう大した影響を與えているとは思われない。

唯農家分家の集團地に多く、且私有土地が多かつた所に多い傾向を示していることは注目すべき

である。

農業経験の有無は開拓事業の進捗に相當影響を與えている如くである。経験あると云うものは自信あるもので50%、僅か有する者25%、全然ないと云うものが25%を示している。僅かにしろ経験の有無が問題であると考えられ、特に無経験者の多い一ノ宮、場廣、中ノ原、北原及七久保針ヶ平等は総合的に見た場合事業進捗がおくれていることが目立つている。

第14表 入植者前歴別(23年12月現在)

地 區 名	普通 引揚	開拓 移場	戦災	疎開	復員	農家 分家	轉職	計
集 團								
一ノ宮	24	6	10	0	10	0	8	58
大芝原	0	3	3	0	2	10	10	30
上溝原	14	8	30	0	23	13	0	88
南 原	0	5	0	19	10	5	5	44
小黒原	8	1	11	0	10	7	14	51
大徳原	5	8	5	8	0	2	0	28
木裏原	1	2	4	4	3	14	25	53
飛行場	2	5	1	0	0	0	3	10
場 廣	0	2	4	0	5	6	0	17
キグタシ	3	2	0	2	2	5	0	14
小 計	57	42	68	33	67	62	64	393
小 地								
北 原	1	0	5	0	5	1	2	14
中ノ原	0	0	2	4	4	0	0	10
飯 島	6	3	0	2	0	0	0	11
七久保	4	6	0	1	0	0	0	11
針ヶ平(七)	4	0	1	0	1	3	0	13
同 (片)	0	2	5	0	0	3	4	18
三 林	0	5	0	0	0	0	8	5
大源田	2	5	0	0	0	0	0	8
柳 沢	3	0	0	3	0	1	1	8
小 計	20	21	13	10	10	8	16	98
合 計	77	63	81	43	77	70	80	491

第15表 入植者の農業経験の有無(23年12月現在)

地 區 名	實 数				同 比 率 %			
	有	僅か 有	全々 無	計	有	僅か 有	全々 無	計
集 團								
一ノ宮	20	10	28	58	35	17	48	100
大芝原	27	1	2	30	90	3	7	100
上溝原	43	30	15	88	49	34	17	100
南 原	25	9	10	44	57	20	23	100
小黒原	41	0	10	51	80	0	20	100
大徳原	10	12	6	28	36	43	21	100
木裏原	16	34	3	53	30	64	6	100
飛行場	7	0	3	10	70	0	30	100
小 地								
北 原	1	0	5	6	17	0	83	100
中ノ原	0	0	2	2	0	0	100	100
飯 島	6	3	0	9	67	33	0	100
七久保	4	6	0	10	40	60	0	100
針ヶ平(七)	4	0	1	5	80	0	20	100
同 (片)	0	2	5	7	0	29	71	100
三 林	0	5	0	5	0	100	0	100
大源田	2	5	0	7	29	71	0	100
柳 沢	3	0	0	3	100	0	0	100
小 計	20	21	13	54	37	39	16	92
合 計	77	63	81	221	35	39	16	90

場 廣	8	0	9	17	47	0	53	100
キグタシ	7	7	0	14	50	50	0	100
小 計	204	103	86	393	52	26	22	100
小 地								
北 原	6	2	6	14	43	14	43	100
中ノ原	0	0	10	10	0	0	100	100
飯 島	7	2	2	11	64	18	18	100
七久保	10	1	0	11	91	9	0	100
針ヶ平(七)	3	0	10	13	23	0	77	100
〃 (片)	10	6	2	18	56	33	11	100
三 林	5	0	0	5	100	0	0	100
太源田	5	2	1	8	63	25	12	100
柳 澤	1	7	0	8	12	88	0	100
小 計	47	20	31	98	48	20	32	100
合 計	251	123	117	491	50	26	24	100

入植者の出身地別(第16表参照) 出身地を見る村内出身者が殆んどで最高率64%弱であり、次いで郡内出身者、縣内出身者であつて、縣外から入植したものは3.5%に過ぎない。更に開拓地所在村に縁故のあるものが殆んど全部で全々縁故関係のないものは6%以下である。こゝに上伊那郡の開拓地の性格の一端が見られ農村の氣風が察知される様な氣がする。即ち外來者を極度に嫌う風習が如實に示されて居るのと考えられるのである。縁故のないものゝ多い一ノ宮、北原等は総合的事業進捗もよくない。これは村その他と交渉等も圓滑に行われぬことも多いからではなからうかと思われる。

第16表 入植者の出身別及開拓地との縁故の有無(23年12月末現在)

地 區 名	村 内	郡 内	縣 内	縣 外	計	村外から入植者の中主婦の生家が村内のもの	村外者でその村に全々縁故がないもの
集 團							
一ノ宮	30	11	15	2	58	0	縣内10
大芝原	10	20	0	0	30	3	縣外0
上溝原	69	6	12	1	88	7	0
南 原	10	14	20	0	44	3	0
小黒原	41	9	1	0	51	3	0
大徳原	12	14	0	2	28	2	縣外2
木裏原	50	0	0	3	53	3	0
飛行場	6	2	1	1	10	0	縣内1
場 廣	7	10	0	0	17	0	縣外0
キグタシ	13	1	0	0	14	1	0
小 計	248	87	49	9	393	22	16

小 中 飯 七 園 針 平 地 柳	北	原	7	1	3	3	14	1	縣内	3
	中	ノ	6	0	0	4	10	4	縣外	3
	飯	原	8	2	1	0	11	1	縣内	1
	七	久	11	0	0	0	11	0	縣内	0
	園	保	3	0	11	0	13	0	縣内	5
	針	平(七)	9	1	6	2	18	3	縣内	0
	地	林	5	0	0	0	5	0	縣内	0
	柳	澤	8	0	0	0	8	0	縣内	0
小 計			65	4	20	9	98	9	12	
合 計			313	91	69	18	491	31	28	

以上上伊那郡の開拓地では入植現況は一般に良い方であるが、これは地元で縁故を求めた引揚、疎開、復員、戦災者等が入植したことに依るものと考えられ、又脱落の多いのもそうした所に原因があるのではないと思われる。又農業未経験者

が25%に上り獨身者が比較的少ない。これ等各地區により若干相違があり、その相違が事業の進捗と大きな関連をもつ様にも見受けれるのである。

V 開墾の状況

1 入植直前に於ける開拓地の状況(第17表参照)

入植直前はこれ等の地區は殆んど山林が主で一部分原野となつて居り、各開拓地は大部分同様な條件から開墾が出發している。しかし二三の特例がある。例えば飛行場の如くであり、又一ノ宮、北原、木裏原、大徳原及び針ヶ平地區では夫々30～60町歩宛終戦直前に農兵隊により簡易開墾された所がある。この總面積は總計221町で全開墾計畫面積の15.5%に當つている。これ等の地區は其の他の地區に比し開墾實施上有利である事は云う迄もないことである。

第17表 開拓直前に於ける開拓地の状況

地 區 名	状 況
一ノ宮	30～40年生赤松林 約60町歩は農兵隊による簡易開墾
大芝原	30～40年生赤松林及25年生檜の混淆林
上溝原	30年生赤松、20年生檜の混淆林 一部原野
南原	7～8年生赤松林及10～15年生檜林
小黒原	30年生程度の赤松と檜、落葉松林
飛行場	飛行場、表土を削りB層に當る褐色粘質壤土が露出
木裏原	40年生赤松林 約30町歩農兵隊による簡易開墾
大徳原	30～40年生赤松林 約50町武農兵隊による簡易開墾
廣野	原野 (10年位前に伐採したまま)
タゲタシ	70～80年生赤松林 一部は落葉松と雜木林
北原	全部農兵隊による簡易開墾
中ノ原	半ば30～40年生赤松林 半ば7～8年生赤松林
飯島	採草地一部離木林
七久保	30～40年生赤松林 一部25年生檜
針ヶ平(七)	原野 一部20年生程度の赤松林
〃(片)	原野と山林が半々 山林は100～150年生檜
三林	15年生檜林
大源田	40～50年生赤松林 及100年以上の檜林
柳澤	10年生程度の檜、樺林

2 開墾地の買収進度(第18表参照)

土地買収はまた完全でなく未買収地が20%あるがこの方は集團地の方が成績がよい。未買収地は私有地の多い所及所有關係の複雑な所に多い。しかし北原と柳澤を除いては昭和24年4月末迄に完了する予定になつて居る。北原は農兵隊の簡易開墾後終戦で一應地主へ土地が返還され、そこへ入

植者が組合も作らず無計畫に入植し個人で借地契約が結ばれた爲に關係が複雑となり、その後組合が組織されたが加入せぬものもあり、入植當地より確固たる計畫がなかつた爲一應開墾は100%となつて居るが耕地が狭く土地の買収には全く手がつかない状態にある。又柳澤は地主の意見で縁故者を入植される様にして居り又計畫も漠然として

いる爲に開墾も進んでいないし地主の子弟以來の所は買収にも手がつかないでいる。場廣は三ヶ村共有の爲遅れているのであり、その他大徳原が目につくがこれは事業開始後二年目である事を考えれば順調である。一般には特殊な条件が介在しない限り買収は順調に進んでいると云つて良い。

3 開墾の進捗度 (第18, 19表参照)

綜合的に見ると計畫面積798.6町に對し現在378.8町で47.8%の進捗を示している。集團地では一部の特例を除き一般に小園地より低いが、これは一戸當の計畫面積が廣い爲であつて、一戸當の開墾實面積から見れば寧ろ集團地の方が大である場合が多いことから明かである。特に開墾進度の悪いところは共同開墾が少なかつたのが大きな原因であり、特に七久保及柳澤の場合は殆んど共同開墾は行れて居らず、場廣及上溝原の場合はその率が到つて低いのである。又特に計畫面積が廣い

に拘らず完了した飛行場は機械開墾が全面的に實施されたに起因している。

開墾の年次進捗度を見ると初年目に最高率を示すものは比較的少なく、小黑原、飛行場、木裏原、キグタン、北原に見られるに過ぎず、第二年次又はそれ以降に最高を示す場合の方が多い。又それがある程度進捗すると速度が鈍る如くである。これは入植者がある一定面積までは急いで開墾を行うがそれ以後は進次耕地を擴大して行く爲と思われる。又第一年月に最高を示すか否かはその地區の方針によるものと見られ、當初に大きく開墾して行くやり方と少しづつ地力の増加をはかりながら耕地を擴張して行こうとするやり方で異つてくものと思われる。飛行場、木裏原、小黑原、北原等は前者の好例であり、上溝原、中ノ原、三林等は後者に屬するものである。

第18表 土地買収及開墾の進捗度 (23年12月末)

地 區 名		總開發 計畫面積	買 收 狀 況		純粹入植 地區面積	開墾計畫 面 積	一戶當計 畫耕地地面 積	開 墾 總面積	一 戶 當 開墾面積	進捗率 %
			買收済	未買收						
集 團 地	一ノ宮	180.0	180.0	0	120.0	72.0	1.2	35.0	0.60	48.6
	大芝原	91.4	85.3	6.1	51.0	45.0	1.5	28.0	0.93	62.5
	上溝原	245.0	145.9	100.0	200.0	175.0	2.0	45.0	0.51	25.7
	南原	100.0	100.0	0	100.0	75.0	1.5	30.0	0.68	40.0
	小黑原	205.9	205.9	0	155.9	120.0	2.0	61.0	1.19	50.8
	大徳原	112.0	75.0	37.0	75.0	50.0	1.7	19.6	0.70	39.2
	木裏原	89.0	89.0	0	70.3	62.5	1.2	51.0	0.96	81.7
	飛行場	100.0	100.0	0	25.0	20.0	2.0	20.0	2.00	100.0
	場廣	57.3	0	57.3	52.5	35.0	2.0	10.2	0.60	29.2
キグタシ	72.2	72.2	0	41.0	32.0	2.0	10.5	0.75	32.8	
小 計		1252.8	1052.4	200.4	890.7	686.5	1.75	310.3	0.79	45.8
小 園 地	北原	45.0	2.3	42.7	12.0	10.0	0.71	10.0	0.71	100.0
	中ノ原	17.8	7.8	10.0	12.0	10.0	1.0	7.0	0.70	70.0
	飯島	25.5	25.5	0	25.5	15.0	1.25	11.0	1.00	73.3
	七久保	22.0	0	22.0	22.0	12.0	1.0	2.5	0.23	20.8
	針ヶ平(七)	23.0	23.0	0	14.4	13.1	1.0	7.2	0.55	54.8
	〃 (片)	22.0	22.0	0	22.0	18.5	1.0	18.5	1.00	100.0
	三林	16.0	3.0	13.0	16.0	6.0	1.2	3.0	0.60	50.0
	大源田	10.2	10.2	0	10.2	10.0	1.25	7.0	0.87	70.0
	柳澤	9.5	5.0	4.5	9.5	8.5	1.0	2.2	0.27	25.8
小 計		191.0	98.8	92.2	136.6	103.1	1.05	68.5	0.69	66.5
合 計		1443.8	1151.2	292.6	1034.3	789.6	1.40	378.8	0.77	47.5

第19表 年次別開墾實績及開墾方法

地 區 名	開 墾 實 績					開 墾 方 法		機械開墾の方法と 使 用 機 械		開墾面積 に対する 機械開墾 の率	手働による反當開墾 の率
	20	21	22	23	計	機械	手起し				
集 團 地	一ノ宮	町	町	町	町	町	町	22年21町	機械拔根	60.0	30
	大芝原	—	3.0	20.0	5.0	23.0	22.0	22年20町	火薬拔根後	71.4	30
	上溝原	10.0	10.0	20.0	5.0	45.0	15.0	22年15町	トラクタ開墾	33.3	50
	南原	—	5.0	10.0	15.0	30.0	15.0	22年10町	フルトナー開墾	50.1	30
	小黒原	—	55.0	6.0	0	61.0	5.0	23年5町	機械拔根	8.1	30
	大徳原	—	—	9.8	9.8	19.6	0	22年5町	フルトナー開墾	0	30
	木裏原	0	34.5	5.5	11.0	51.0	0	—	—	0	30
	飛行場	—	12.0	8.0	0	20.0	16.0	22年12町	23年4町 ト	80.0	25
	飛場	—	3.0	2.0	5.2	10.2	0	ラックター開墾	—	0	45
	キグタシ	—	7.0	1.0	2.5	10.5	0	—	—	0	40
小 計		10.0	139.5	104.2	56.5	310.3	92.5	218.3		29.6	34
小 團 地	北原	—	8.5	1.5	0	10.0	0	10.0	—	0	30
	中ノ原	—	2.0	3.0	2.0	7.0	0	7.0	—	0	50
	飯島	—	3.0	5.0	3.0	11.0	0	11.0	—	0	30
	七久保	—	—	1.2	1.3	2.5	0	2.5	—	0	30
	針ヶ平(七)	1.0	1.4	2.2	2.6	7.2	0	7.2	—	0	50
	川(片)	—	6.0	12.5	0	18.5	0	18.5	—	0	45
	三林	—	0.4	1.0	1.6	3.0	0	3.0	—	0	40
	大源田	—	—	2.5	4.5	7.0	0	7.0	—	0	40
小 團 地	柳澤	—	0.5	1.0	0.8	2.2	0	2.2	—	0	20
	小 計	1.0	21.8	29.9	15.8	68.5	0	68.5		0	43
合 計		11.0	161.3	134.2	72.3	378.8	92.0	286.8		24.0	38

4 開墾の方法(第19表参照)

開墾の方法は大部分が手起しである。機械開墾は最初の予定では集團地の40%を行う予定であつたが燃料不足と故障が多かつた爲予定の如く行われずに留つた。機械開墾は小團地に於ては全然見られないが、一戸當の開墾面積で見ると機械の導入の効果はあまり見えない。それは機械開墾は一應29.6%であるが、その中根拔のみの場合が8.5%を占めて居り、完全に行われたのは21.1%に過ぎなかつた事も一つの原因であろう。要するに上伊那郡下の開拓地の場合は手起しによる開墾が主体であつて、機械も導入されたが機械開墾は若干勞力的に有利であつたことは否定出来ないが飛行場の一例を除き開墾の進捗度にも、又當農にも大きな効果を示さなかつたと言うのが實狀ではあるまいかと思われる。その他先にも少し觸れた如く多くは共同開墾が行われたが一般に共同開墾は開拓當初に多く遂次減少する傾向にある。即ち一定面積の土地が開墾されると之を各戸に分割し、以後

個人別に行われると云う具合である。そして最初から個人別に開墾が行われたか又は共同から個人に移行する時期によつて開墾の進度の早遅が出来るのであつて、柳澤、七久保等は初期からで一番低く、場廣、上溝原、等は共同分野が狭い爲にやはり進度が遅れている。又共同で始り個人に移行する爲土地の分配が計画的でなくなり折角の耕地統合の機会に恵まれていながらこれが行われて居ない状態にあるのも問題とすべき点であろう。この点飛行場は一舉に開墾されたため非常に巧く行つてゐる。

5 開墾進度と諸條件(第20表参照)

開墾の進度は一應開拓事業の進捗の一指標と考えてよいと思われるから茲でこれに關係する諸條件を考えて見たい。大体殆んど同様に近い状態から出発したに拘わらず如何なる原因で開墾進度が異つてくるのであろうか。勿論入植者個人の素質能力にもよることは云うまでもないが、調査に表われた所で検討して見ることにする。

これは他の條件が同一なれば平行的にならなければならぬものと思われるので當然である。尙一戸當の可働人員とはあまり関係がない様であるが、これはやはり共同開墾が行われる爲に消去されているのであろう。

入植者の學歴はあまり関係ない様であるがこれはその學歴の有するものの素質が大きく作用するので一概には云えない。又農業経験の有無は他の要因に支配されて例外があるが未経験者の多いことはやはり好い影響は與えない。尙地元との縁故の有無は開墾には直接関係がないと思われ、又前歴、脱落も大した関係が未だ見出されない。

以上要するに開墾の進度に大きく影響するのは事業主体、開墾の難易及方法、一戸當計畫面積が主なるもので之れが入植進度、入植者の素質、土地買収の進捗が加わり更に社會的及び政治的な要因が目に見えない影響を與えていると解してよいであらう。

VI 開拓農村建設の概況

1 資金狀況

開拓入植者は一般に入植當時その資金を所持するものは少く上伊那郡下の如く引揚、戦災者が多い所では猶更である。農家の分家の場合は多少生家からの援助が行われているが一般には裸一貫の入植が多く、従つて営農及住宅の建設等の面で一應事業が軌道に乗る迄の出費に堪えられないものが大部分である。その爲國家からの補助金の交付と資金の貸付が行われている。

補助金 補助金には道路や共同施設又は住宅の建設を對象とした施設補助金と開墾に對する開墾補助金の二種があるが、住宅建築補助金を除いて集團地と小園地で異つている。(第21表参照)即ち同じ一反歩を開墾しても昭和23年4月以前は小園地では集團地の6割しか補助金が出ず、更に同23年4月以降はその差が大きい。資金の有無が事業の進展に大きく影響することは開拓事業でも同様であるから國家が面積の廣い集團地に對し期待する所が多く、然してこの様な差異が設けられたのも一理あるが、現實の場合は集團地に於ても純粹入植の極めて少ない場合もあつて一概に云えず結局この差別は開拓者の要請により24年4月以降廢止されることになつた。

第21表 補助金の小集團地の差異

昭和23年 4月以前	施設補助金 (團體に對し)	建設工事に對し— 集團地反當800圓 小園地なし 住宅に對し— 住宅補助金 1戸當 45,000圓 集團地に差なし
	開墾補助金	開拓者個人に對し— 集團地 反當 1,500圓 (平均) 小園地 反當 900圓 地區により若干差あり
昭和23年 4月以降	施設補助金 (團體に對し)	建設工事に對し— 集團地反當800圓 小園地なし 住宅に對し— 住宅補助金 1戸當 54,000圓 集團地に差なし
	開墾補助金	開拓者個人に對し— 集團地 5,100圓 小園地 1,024圓

融通資金 これは昭和22年2月より實施された「開拓者資金特別融通法」に基くもので開拓者が営農に必要な又建築に必要な資材の購入、及建築等に對し融通されるもので一戸當営農資金7000圓及住宅資金3000圓計1萬圓が限度である。條件は年利3.65分5ヶ年据置後15ヶ年年賦償還であつて對象は個人でも組合でもかまわない。しかしこれは23年4月以後は現物融資の形になり入植初年目は1戸當大体2萬圓程度で手農具一式及5~10戸を標準に大畜1頭、牛馬車1台、及畜力農具1揃が貸與され、2年目肥料等で約1萬圓計3萬圓程度の資金が現物で融資される如くなつた。

以上が國家から交付又は貸與される資金であるが入植者はこの資金を最大限に利用して居り、自己資金は殆んど所持しないものが多い。上伊那郡下の各開拓地でも同様であつてすべてこの資金に依存する所大である。しかしこれ等の資金が直接建設の面に消費されるより生活面に消費される場合が多く、こゝに一つの問題がある様に思われる。この程度は各地區共に相當大と思われるが明かにすることは出来なかつた。又現物融資の場合も肥料等は一部間流しをされた模様もある。

更に大きな問題はこれ等の資金がうまく開拓者の手に渡つているかどうかと云うことであるが、色々な中間機關や又は開拓ボスの介在により種々の理由のもとに天引されている事が相當に多くあつた模様である。これ等は開拓事業の進捗に大きく響いていることと思われるので色々尋ねては見たが正確な答は得られなかつた。要するに上伊那郡下の入植者は殆んど自己資本より交付又は貸與

資金に依存して居り、柳澤の如き特殊な地區以外は殆んど変らなかつた。

2 住宅及共同建築物の建築状況 (第22, 23表参照)

住宅の本建築は總体的には76%であつて比較的良好である。住宅の建設は二つの特別を除いては集團地の方が良好であつて、特に住宅建築が遅れている一ノ宮及場廣では地元を生家のある獨身

者の入植者が非常に多いことが原因になつてゐる。バラックには殆んど住んでいるものはなく、夏期の宿泊の爲のものである。住宅の建築は組合の團結が強く資材の共同購入、又は共同で拂下を受けた所が早く、各個別々に資材を見つけて建築した所は遅れている。特に小黑原及びキグタシ等では全戸同一型式のものが建てられている。

第22表 住宅の建築状況 (23年12月末現在)

地 區		計 畫	本建築	既存建 物利用	バラック 通 い		計	用材取得關係 (本建築)	進捗度 本建築
集 團 地	一ノ宮	58	19	3	0	36	58	個人別	33
	大芝原	30	22	0	4	4	30	村有林拂下 (共同有償)	73
	上溝原	88	64	4	0	20	88	個人別	74
	南原	44	44	0	0	0	44	組合共同購入	100
	小黒原	51	46	0	0	5	51	〃	90
	大徳原	28	24	0	4	0	28	個人別	86
	木裏原	53	53	0	0	0	53	組合共同購入	100
	飛行場	9	9	0	0	0	9	個人別	100
	場廣	17	1	0	8	8	17	〃	6
	キグタシ	14	14	0	0	0	14	組合共同購入	100
小 計		392	296	7	16	73	392		75
小 團 地	北原	14	11	0	0	3	14	個人別	79
	中ノ原	10	10	0	0	0	10	〃	100
	飯島	11	8	0	3	0	11	村有林拂下 (共同無償)	73
	七久保	11	8	0	0	3	11	村有林拂下 (共同有償)	73
	針ヶ平(七)	13	9	0	2	2	13	個人別	69
	針ヶ平(片)	18	15	0	3	0	18	村有林拂下 (共同有償)	83
	三林	5	5	0	0	0	5	〃	100
	大源田	8	8	0	0	0	8	村有材拂下 (共同無償)	100
	柳沢	8	3	1	0	4	8	個人別	37
小 計		98	77	1	8	12	98		78
合 計		490	373	8	24	85	490		76

第23表 共同建築物の建築状況 (23年12月現在)

地 區 名			計 畫	實 績	備 考
集 團 地	一ノ宮	4	3	内炭小屋 2 事務所兼集會所 1	
	大芝原	1	0	集會所兼作業場として敷地 2 反をとつてある	
	上溝原	3	(3)	15坪農協より借用 倉庫及事務所村農協より借用	
	南原	4	4	倉庫15坪 共同作業所32坪 診療所15坪 事務所兼集會所13坪	
	小黑原	1	1	共同作業所兼集會所 16坪	
	大徳原	1	0	計畫中	
	木裏原	3	3	共同作業所 2 集會所 1	
	飛行場	1	0	氣象觀測所を共同作業所に持下げを受ける豫定	
	場廣	1	0	考慮中	
	キグタシ	1	1	共同作業所兼集會所 15坪	

小 計			20	12(3)	
小 團 地	北 原		0	0	
	中 ノ 原		1	0	未計畫
	飯 島		0	0	
	七 久 保		2	0	未計畫
	針ヶ平(七)		1	0	申請中
	〃 (片)		1	1	共同作業所兼集會所 10坪 (24年1月完成豫定)
	三 林		1	0	計畫中
	大 源 田		1	0	〃
	柳 澤		1	0	〃
小 計			8	1	
合 計			28	13(3)	

註 () は既設を借用のもの

住宅の型式は特に注目すべきものは見當らなかった。舊農家の様式がそのまま受繼がれている。この地帯とすれば防寒建築が必要とされる所が大部分に拘わらず全然考慮が拂れて居らず、指導者も亦開拓者も住宅合理化に對する關心は全然見受けられなかつた。

住宅の建築はその土地にどうしても住居を持たねばならない關係にある入植者の多い場合に早くなつて居り、又これは當然のことである。

共同建築物は住宅に比し建築が遅れているが團結が強い所ではやはり進んでいる。住宅資材も共同購入をした南原、小黑原、木裏原及キグタシではやはり100%を示している。唯一の例外の一ノ宮の場合は3棟中2棟が炭小屋であつてバラツクに近いものであり、實際の計畫のものではない。他は殆んど手についていない有様であつて、共同精神の強い所と弱い所との差が明かとなつて居る如く思われる。

3 用水の狀況

用水の解決と云ふことはこれ等の開拓地がかつて耕地外に置かれていた最大の原因になつて居た事からも、又入植者が生活を維持する点からもこれらの開拓農村建設の爲には必須の條件である。

最初より水の問題のなかつた場廣、キグタシ、飯島及七久保の四箇所に於てもキグタシを除いては水利權はなく飲料用水のみ一應解決している程度である。しかしこれ等の地區は生活には不自由のない程度に水を得ているからよいとして、問題は他の地區である。

一番問題になるのは飛行場である。湧水及流水

はなく地下水は低く井戸を掘ることも不可能である。こゝでは目下旧格納庫の屋根を利用して雨水を集積し飲料その他に供している状態で旱天の續く場合は困難を極めて居る。格納庫も拂下の告示があり、早急に用水の解決にせまられている。次いで苦しいのは一ノ宮及上溝原である。地區外の流水を利用しているが公然と利用出来るのは冬期間のみで夏期は盗水と云うのが實狀である。上溝原は昭和23年末に一部に水道が入り解決の端緒が出来たが一ノ宮は見通しは全然なく水汲の爲一里以上の所を往復している現狀である。小黑原も之に近く冬期は地區内の流水を利用できるが夏期は公然とは使用出来ない状態である。南原は1箇の井戸に全員が依存している現況でやはり困難を極めて居る。以上が一部には解決の端緒を得た所もあるが最悪の状態にある所である。

大芝原、木裏原及大徳原は地區内の流水を主に一部湧水(大徳原)を利用し不自由ながらも一應生活に必要なものは得ている如くである。

井戸を掘り之に依存して比較的よいのは雨針ヶ平地區(22眼)大源田(8眼)であり、井戸を掘つたが少なく不自由しているのは柳澤(2眼)北原(4眼)及中ノ原(1眼)である。一般に井戸は小團地に多いが地區が狭く流水に恵まれないからである。三林は一箇の湧水に頼つて居る。

用水は以上の如く生活の必要上から何とかして獲得しているものの殆んどの地區が解決するに至らないのである。これは入植者に影響する所が大であり、従つて事業の進捗にも大きな影響を與えるものであると云える。この点开拓地の選定に當

つては入植者の生活条件が全然無視されていると云うことが云い得るのであつて、今後は正されなければならぬ点であると共に、選定監督者の側としては之の解決策を考えなければならないであろう。

4 電燈引込の状況 (第24表参照)

電燈は用水程生活には絶体的なものでないが生活の便不便には多分影響あることは云うまでもない。この方は資金及資材の關係上圓滑に行われていない。既設線の近い所でも引込が行われていない場合が多いから資金難が最大原因と思われる。3ヶ年を経過した現在、地理的に見てもそう困難と思えないに拘わらず全体で35%であるからあまり良い方ではない。まだ見通しの全然ない所が15.5%もあることは問題であつて速かに解決する如き施策がほしいものである。入植者は大体電燈下の生活の経験者ばかりであるので電燈のない生活にも大きな苦痛を感じている。

第24表 電燈引込の状況

地 區 名	引込みを終つた所	24年中に引込めたる豫定		25年中に引込めたる予定		計
		24年中に引込めたる豫定	25年中に引込めたる予定	25年中に引込めたる予定	25年中に引込めたる予定	
集 團 地	一ノ宮	0	0	58	0	58
	大芝原	0	0	30	0	30
	上溝原	27	39	0	22	88
	南原	44	0	0	0	44
	小黒原	39	0	12	0	51
	太徳原	0	0	0	28	28
	木裏原	33	20	0	0	53
	飛行場	9	0	0	0	9
	場廣	0	11	0	6	17
	キグタシ	0	0	0	14	14
小 團 地	北原	0	0	14	0	14
	中ノ原	0	10	0	0	10
	飯島	1	10	0	0	11
	七久保	0	6	0	5	11
	針ヶ平(七)	0	13	0	0	13
	〃 (片)	0	18	0	0	18
	三林	5	0	0	0	5
	大源田	8	0	0	0	8
計		169 (35)	127 (26)	114 (24)	75 (15)	485 (100)

註 24年以降は計畫戸數

() の中は比率

※柳澤の場合は建設戸數についてのみ示す

電燈の引込は本建築の進捗の早い所に良好であ

る傾向があり又見通しもついている如くである。例えば集團地では南原、小黒原及木裏原の如くである。これ等はやはり住宅の建築と伴つて各人が建設を促進しようとする強い意志のもとに強い團結が見られる所程この様な建設は促進されて行くことを示していると云つて良い。

5 開拓道路の建設状況

附圖1に示した如く地方事務所の計畫で各開拓地を結ぶ開拓道路が設計され現在中箕輪大出一小澤間(3間巾)小澤川一小黒原南端(2.5間巾)が完成している。その他各地區では縦横に整一に農道が計畫設置されている。

6 防風林採草地の設定 (第25表参照)

防風林は防風兼下草刈場として採草専門の場所として採草地が大部分の地區に引て設定されているがその廣さは地區により大きな差が見られる。太体開拓にあつて立木は全部伐採されて防風林として計畫的に残された所はなく植樹している所が多い。地區としては場廣、キグタシ、飯島、七久保及三林は地勢的に見て必要はないがその他はすべて防風林の必要がある。北原では過去に於て風の爲バラツクが三棟倒壊して居り、飛行場も特に風が強いが面積に余裕がなく苦しんでいる。そして防風林として完成している所は未だない。これなども開拓計畫に際して少し注意すれば簡單と思われるが實際は入植者が必要にせまられて再び植樹する様な有様で無駄が多くなつている。

採草地では自給肥料とも關係があり當農上大切であるが一見大きすぎると思われる所がある。大徳原、場廣、飯島、七久保、三林等であるが、これ等の地區は將來耕地擴張と入植増加の余地を残している爲である。

7 住宅の建設進度と諸條件 (第36表参照)

住宅の建設は開拓農村建設の指標としてよいと思われるから之の進度で各地區を區分し他の條件との關係を見ると次の如くなる。

開墾の進度とはやはり相當の關連がある様で、開墾の遅れている地區で住宅の建設が進んでいるのは極く一部にしか見られず、どちらかと云えば開墾の進度と住宅の建築進度は平行している場合の方が多い。

住宅建築進度に最も強い關係にあるのは入植者の状態であると考えられる。入植者の立場が大体同一であつて團結協力が強い程早くなると思われ

る。しかもそれ等の入植者がどうしてもその地に
住居を持たねばならないと云う場合である。立場
が異なる者例えば住家から通える獨身の入植者等が
多く混るときはどうしてもその開拓地の團結協力
は阻害されやすく一致した行動が亂される如くで

あり、これらが住宅の建築進度にも關係して來る
し又農村建築速度にも影響を與えることは當然で
ある。之に加えるに地元の理解と援助が關連して
いる。

第25表 防風林及採草地の設定状況

地 區 名		計畫地區	計畫開墾	防 風 林 及 採 草 地					増反者・測量誤差
		面 積	面 積	防風林	採草地	計	一戸當	計畫開墾 面積對比	其の他による縮少
集 團 地	一ノ宮	120.0	72.0	10.0	0	10.0	0.16	14	38.0
	大芝原	51.0	45.0	0	0	0	0	0	6.0
	上溝原	200.0	175.0	0	5.0	5.0	0.05	3	20.0
	南原	100.0	75.0	10.0	0	10.0	0.20	13	15.0
	小黒原	155.9	120.0	0	25.0	25.0	0.41	21	10.9
	大徳原	75.0	50.0	10.0	10.0	20.0	0.66	40	5.0
	木裏原	70.3	62.5	0	0	0	0	0	7.8
	飛行場	25.0	20.0	0	1.0	1.0	0.10	5	4.0
	場越	52.0	35.0	0	17.5	17.5	1.03	50	0
キグタシ	41.0	32.0	0	9.0	9.0	0.56	28	0	
小 計		89.7	686.5	30.0	67.5	97.5	0.23	14	106.7
小 團 地	北原	12.0	10.0	0	0	0	0	0	2.0
	中ノ原	12.0	10.0	0	0	0	0	0	2.0
	飯島	25.5	15.0	0	9.7	9.7	0.80	64	0.8
	七久保	22.0	12.0	0	10.0	10.0	0.83	83	0
	針ヶ平(七)	14.4	13.1	1.3	0	1.3	0.08	10	0
	〃(片)	22.0	18.5	2.2	0	2.2	0.12	12	1.3
	三林	16.0	6.0	0	10.0	10.0	2.00	166	0
	大源田		10.0	0	0	0	0	0	0.2
	柳澤	9.5	8.5	0	1.0	1.0	0.12	12	0
小 計		133.6	103.1	3.5	30.7	34.2	0.30	33	6.3
合 計		1034.3	789.6	33.5	97.2	131.7	0.25	17	113.0

註 宅地予定面積等に相疑問がある

第26表 住宅建築進度を指標とした場合の各條件との關係

區別	住宅建築 進度	地 區 名	開墾進 度 (3)	通入得 獨身の 者の多少 (1)	共同の 強 々	地元の 援助の 強 々	用水の 條件 (現在)	電 燈 の 引 込 状 況	防風林及 採草地の 設定 (2)
集 團 地	良好	南原	稍可	少	強	稍強	最惡	完了	中
	〃	木裏原	良	少	強	強	中	半完了 24年中の予定	無
	〃	飛行場	良好	少	強	普通	最惡	完了	小
	〃	キグタシ	不可	少	強	普通	良	見込なし	大
	良	小黒原	可	中	普通	稍強	惡	完了 残2~3年中の予定	大
	〃	大徳原	可	中	普通	普通	中	見込なし	大
	可	大芝原	良	中	普通	強	惡	2~3年中の予定	無
	〃	上溝原	不可	多	稍弱	普通	惡	一郎完了 2~3年中の予定	小
	不可	一宮廣	稍可	多	稍弱	普通	最惡	見込なし	中
合 計	〃	場	不可	多	弱	普通	良	24年より2~3年中の予定	大

小 團 地	良好	中ノ原	良好	少	普通	普通	最悪	24年の予定	無 大 無 中 無 大 大 中
	〃	三 林	可	少	稍強	稍弱	中	完了	
	〃	大 源	良好	少	稍強	強	中	完了	
	良	針ヶ平(片)	良好	中	強	普通	中	24年の予定	
	可	北 原	良好	中	弱	普通	悪	2~3年中の予定	
	〃	販 島	良	中	強	強	良	24年の予定	
	〃	七 久 保	不可	中	稍弱	稍強	良	半24年の予定 半見込なし	
地	稍可	針ヶ平(七)	不可	多	普通	稍強	中	24年の予定	大 中
	不可	柳 澤	不可	多	弱	弱	悪	一部完了 他は見込なし	

註 住宅の建築進度. 良好は91~100%. 良は81~90%. 可は71~80%. 稍可は61~70%. 不可は60%以下

(1) 多い31%以上. 中は11~30%. 少は10%以下

(2) 大は21%以上. 中は11~20%. 小は0~10%. 無0%以下(開墾面積對比)

(3) 第20表による

その他の條件は上述の問題に比するとそう大きくないが、やはり生活の便不便は多分に関係がある様である。逆に飛行場、南原の如く用水欠乏が全員が協力せざるを得ない立場に陥れ、これが逆つて効果を上げる原因となつてゐる如き場合もある。住宅の建築の早い所はやはり電燈の引込も早く、農村の建設は一步一步先んじてゐる如くである。

要するに開拓農村の建設は入植者の團結協力により推進されるものであつて他の惡條件はこれによりある程度迄排除又は解決して行ける様に思われる。之が爲入植者の選定の際はよく考慮さるべきであらう。旧い開拓移民の引揚集團入植の場合等に開拓農村の建設が比較的速であることからしても、入植者選定に際しなるべく立場を同じくして團結協力出来る如き人々を集團として入植させると云ふ様なことが考えられなければならない

Ⅶ 營農の現況

1 土地利用について(第27表参照)

調査した開拓地に於ては二三の例外はあるが一

般に高いとは云えない。開墾開始後3年目の現在平均88%を示して居り、作付されていないところのあることを示している。集團地より小團地の方が一般に土地利用度の高い傾向が見られるが、これは小團地の方が開墾計畫面積が狭く耕地擴張に對する氣分的な余裕と開墾にさかれる勞力が少なくてよいと云う所に原因があると考えられる。それ故小團地では99%となつて一應開墾された所はすべて作付されていることになり、之に對して集團地では85%で未作付地が相當あることを示している。

土地利用度の年次別変化を見るとやはり開墾が進むにつれて土地利用度が増加する傾向にある。これはやはり開墾に追われることが減少する爲と見てよい。しかし初年次に土地利用度が非常に高い所があり、特に小團地に多く且開墾面積の狭い所に多いのは入植者の現状から狭い面積をそれだけ活用しなければならぬ立場にあるからと見てよいであらう。又一方未作付地の多い所では補助金目當に形式的に開墾された所が開墾面積に含まれてゐる爲と見られる地區がある。

第27表 土地利用率(地區別年次別)

地 區 名			第 一 年 目			第 二 年 目			第 三 年 目		
			開墾面積	作付面積	利田率	開墾面積	作付面積	利田率	開墾面積	作付面積	利用率
集 團	一ノ宮		10.0	10.0	100	32.0	23.5	89	35.0	39.5	113
	大芝原		3.0	1.6	53	23.0	11.4	49	28.0	15.4	55
	上溝原		10.0	2.0	20	20.0	16.8	80	40.0	40.4	101
	南 原		5.0	0.9	18	15.0	11.0	73	30.0	22.4	75
	小黒原		55.0	13.3	24	61.0	23.5	38	61.0	34.5	56
	大徳原		9.8	9.6	98	19.6	32.7	166	—	—	—
	木裏原(1)		34.5	40.5	117	40.0	38.0	95	51.0	51.5	101

地	飛行場	12.0	12.0	100	20.0	12.6	63	20.0	24.9	125
	場	3.0	2.2	73	5.0	6.0	120	10.2	9.0	88
	キグタシ	7.0	4.4	63	8.0	4.1	51	10.5	7.9	76
小計		149.3	96.0	64	243.6	183.8	75	285.7	245.1	85
小 團 地	北原	8.5	6.0	70	10.0	6.0	60	10.0	8.0	80
	中ノ原	2.0	2.0	100	5.0	5.5	110	7.0	8.5	121
	飯島(2)	3.0	0	0	8.0	10.2	127	11.0	16.6	151
	七久保	1.2	1.3	108	2.5	2.6	104	—	—	—
	針ヶ平(七)	1.0	1.0	100	2.4	3.1	129	3.6	3.6	100
	〃(片)	6.0	6.0	100	18.5	11.8	63	18.5	14.1	76
	三林	0.4	0.5	125	1.4	2.3	164	3.0	2.5	83
	大源田	2.5	2.6	104	7.0	4.2	60	—	—	—
	柳沢	0.5	0.6	120	1.5	1.3	86	2.2	1.6	73
小計		25.1	20.0	79	56.3	47.0	83	55.3	54.9	99
合計		174.4	116.0	67	299.9	230.8	77	341.0	300.0	88

(1) 20年10月より開墾され21年より作付られた爲21年を初年次とした

(2) 初年目は開墾されても作付の余裕がなかった

地區的に見れば大芝原、小黑原が特に低く、飛行場、飯島及中ノ原が高い。土地利用度もその地域の事業進捗と関連することは當然で飛行場及飯島地区は最も進んでいる地区である。

要するに一般的に見て初期は開墾に追われ作付が少く土地利用度が低く、事業が進むにつれて土地利用度が高くなると云える。又現状は土地利用度は極めて低く、高いと思われる所も飯島地区を除き充分とは云えない。この地帯の畑地では標準から云えば160~170%に達しなければならない。

2 農具の導入状況(第28表参照)

大農具は各地区各農家共に営農に必要な最低限は所有して居りその数も多く正確な調査は期し得られなかつたので大農具のみについて述べる。

一般に大道具の導入はあまり進まず運搬用の車が最も多くなっている。耕轉用具も比較的少なく又加工用具は殆んど脱穀機と唐箕のみと云つてよい。集團地と小團地と比較すると数の上では集團地が多いが一戸當を見ると一二の例外を除き小團地の方が所有度は高い。地區的に見て多い所は飛行場、木裏原、小黑原、北原及飯島で比較的良好である。

所有形態を見ると全般的に見ると相當共有農具が多いのが見られるがこれは農具の種類及地區によつて異なる。農具の種類から云えば牛馬車には共有が全々なく大家畜の飼育との関連を示し、又荷車の共有も少く運搬具には共有の少ないのが見

立つのである。地區的に見れば集團地では場廣、キグタシは全部共有であり、木裏原及南原には共有が多く、之に對して小黑原及上溝原には共有が存在しない。小團地では三林が全部共有、飯島、中ノ原及大源田に多く、北原、七久保及柳澤には共有農具がない。農具の共有は當然作業の共同に結びつくからして以上の地區では夫々その特徴があらわれている如くに思われる。これら共有の農具は小團地のものは全部、集團地では約半ば近くが昭和23年現物融資の形で入つたものである。

畜力農具 畑作地帯で土壤も軽く又面積も廣く畜力の導入には好適であるに拘らず一般に少く、又地區的に大差がある。一般に少ないのは大家畜と関係もあるが資金の難と切株が残つて畜力耕耘が困難だと云うに大きな原因がある、しかし一の宮等の如く家畜数が相當多に拘らず殆んど畜力農具が導入されていない所もあり、入植者が畑作を中心とした大面積経営に認識が欠けていると云うことも一つの原因となつている。地區的に見て比較的進んだ飛行場、木裏原、大徳原、南原及小黑原等に多いと云うことも開拓地の農業のあり方の考え方によるものではないかと思われる。

種類としてはカルチベーターが最も多く、すき、ブラウ、及ハローの順となつている。

加工用具 加工用具としては人力脱穀機及唐箕が主体である。これは收穫物を處理する爲の最低限度であることを示し資金關係から他のものを購

第28表 各地地の農具の導入状況(昭和23年12月末)

地 区 名		畜 力 農 具										動 力 及 加 工 農 具														其 の 他				計	一戸 當点	共有 率%
		す き		ブラウ		カルチ ペーター		ハロー		牛馬車		電動機		動 力 脱穀機		人 力 脱穀機		精米機		製糲機		製筵機		唐 箕		噴霧機		荷 車				
		共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有	共有	私有			
集 団 地	宮ノ大	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	11	0	0	1	0	1	0	0	3	—	—	0	8	25	0.43	8	
	芝原	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	7	14	0.46	14		
	上原	0	4	0	0	0	1	0	0	0	6	0	1	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	6	0	4	0	0	32	0.35	0	
	南原	5	0	2	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	7	0	1	0	0	0	0	0	—	—	—	—	0	2	24	0.52	62	
	小黒	0	2	0	2	0	3	0	2	0	2	0	1	0	0	15	0	0	0	2	0	0	—	—	0	5	0	20	54	1.06	0	
	大徳	0	0	3	0	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	5	2	0	1	5	24	0.86	38	
	木裏	2	0	1	0	4	2	1	0	0	4	1	0	1	0	18	4	0	0	0	0	0	10	5	11	5	4	9	82	1.55	65	
	飛場	0	0	0	1	2	2	0	1	0	2	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	1	2	1	3	0	2	21	2.10	38	
	キグダシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	6	0.41	100	
小 計		7	6	6	3	9	8	1	3	0	24	1	2	1	0	32	48	1	0	1	2	1	0	15	22	20	17	6	53	239	0.73	35
小 団 地	北原	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	2	11	1.57	0	
	中ノ原	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	5	0.50	60		
	飯島	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	3	0	14	1.27	71		
	七久保	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.18	0	
	針ヶ平(七)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3	1	3	12	0.92	25		
	〃(片)	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	3	1	0	1	2	13	0.72	38		
	三大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3	0.60	100		
	林田	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	7	0.87	57	
	柳 澤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0.25	0		
小 計		0	5	0	0	2	2	2	1	0	1	0	0	0	8	7	0	0	0	3	0	1	2	5	6	8	6	10	69	0.76	41	
合 計		7	11	6	3	11	10	3	4	0	25	1	2	1	0	40	55	1	0	1	5	1	1	17	27	26	25	12	63	358	0.74	36

北原は開拓組合加入農家のみ

入する所まで行つていない事を示すものである。又これさえない所があり、上源田、柳澤、三林等であるが資金難が原因となつてゐる。

電動機は3台入つてゐる。小黑原及上瀧原に私有が夫々一台、木裏原に共有一台であるが上溝原には之につながる機具が見られず、小黑原には製繩機が私有で存在する程度であるが木裏原の場合は動力脱穀機を共有で附屬させてゐる。開拓地の進捗は木裏原の方が進んで居り動力の方も充分に活用されている所が目立つのである。

その他 其の他のものとしては荷車と噴霧器が主なものである。これ等は大体數の差はあるが何處の地區にも導入されている。

以上が大体大農具の導入の概況である。大農具の導入は事業の發展と密接な關係があり、又事業を發展さす一つの動力ともなり表裏一体關係にあると云つてよいのであるが、一般的には資金難の爲とは云いながら積極性がなく家畜等も徒らに糞畜として肥料の生産のみに飼育されている現状であつて一考を要する点が少くないのである。

3 家畜の導入状況 (第29表参照)

一般的傾向として大家畜は少く中家畜、小家畜の順に多くなつてゐる。これは資金の少い所では當然のことである。又大家畜は集團地に、小家畜は小團地に多い。

大家畜 集團地では4戸に一頭、小團地には5戸に一頭の割合に導入されている。地區的には飛行場及飯島が有畜度夫々0.77及0.73を示し、他に比

して斷然多くなつてゐる。其の他では一ノ宮、大徳原、及木裏原が比較的によく、それ以外は0.3以下である。大家畜の多少は採草地の多少及面積の大小とも關連があるのは當然であるが前項に述べた如く畜力農具の導入が非常に少なく多くの地區では堆肥生産及運搬が主要なる仕事になつてゐる。

種類から云えば役牛が最も多く、馬、乳牛の順である。乳牛は大徳原に多いがこれは役兼用の考えて導入され目下搾乳は行われてゐない。

中家畜 中家畜は大家畜に比して多く、1戸當り1頭以上の所が飛行場、キグタシ、大源田、飯島及三林の五地區に見られる。又集團地より小團地に多いのはその目的が役畜と云うより寧ろ厩肥生産が主であるところから小團地では目下の所費用のかゝらぬ中家畜で代用してゐると見てよい。

種類では栄養の補給と飼育の容易な点で山羊が最も多く、次いで集團地では緬羊、小團地では豚となつてゐる。

小家畜 家畜中最も多いのは小家畜で、これは飼育に経費及勞力がかゝらず容易であるのと日々僅かながら収入が上がることによるものである。従つて雞が斷絶多くなつてゐる。地區的にはやはり飛行場に最も多く1戸當25.5羽となつて居り、10羽以上の所は木裏原、大徳原、飯島、北原及片桐針ヶ平の6箇所である。少ない所は2羽以下の一ノ宮である。

第29表 各地區の家畜導入状況

地 區 別	大 家 畜						中 家 畜					小 家 畜				
	役牛	乳牛	馬	計	1戸當		豚	緬羊	山羊	計	1戸當	鶏	兎	其他	計	1戸當
集團地	一ノ宮	24	0	3	27	0.47	0	10	16	26	0.45	23	43	0	66	1.14
	大芝原	2	0	1	3	0.10	2	0	13	15	0.50	50	20	0	70	2.33
	上溝原	3	0	15	18	0.20	6	4	28	30	0.43	143	127	0	270	3.06
	南原	7	0	2	9	0.20	3	0	13	16	0.36	35	60	0	95	2.16
	小黑原	3	1	3	7	0.14	5	4	34	43	0.84	220	120	0	340	6.65
	大徳原	2	10	0	12	0.43	0	1	12	13	0.46	189	93	0	282	10.01
	木裏原	13	2	4	19	0.36	3	8	17	23	0.53	370	160	0	530	10.00
	飛行場	5	0	2	7	0.77	0	0	9	9	1.00	60	170	0	230	25.50
	廣	0	0	0	0		0	0	14	14	0.82	30	20	2	52	3.04
小	キグタシ	2	0	0	2	0.14	1	4	17	22	1.57	14	39	0	53	3.78
	小計	61	13	30	104	0.26	20	31	173	224	0.57	1134	852	2	1988	5.05
小	北原	1	0	1	2	0.28	0	1	3	0	0.85	30	50	0	80	11.40
	中ノ原	1	0	0	1	0.10	0	0	4	4	0.40	7	20	0	27	2.70

團 地	飯島	7	0	0	8	0.73	8	1	22	31	2.81	50	100	0	150	13.60
	七久保	1	0	0	1	0.09	0	1	6	7	0.64	25	30	0	55	5.00
	針ヶ平(七)	1	0	0	1	0.08	2	0	1	3	0.23	32	25	0	57	4.38
	〃(片)	5	0	0	5	0.28	1	0	9	10	0.56	104	83	0	187	10.40
	三林	1	0	0	1	0.20	0	0	5	5	1.00	8	10	0	18	3.60
	大源田	0	1	0	1	0.13	3	0	7	10	1.25	36	30	0	66	8.25
	柳澤	1	0	0	1	0.13	0	0	4	4	0.50	20	20	0	40	5.00
小計		18	1	2	21	0.21	14	3	63	80	0.81	312	368	0	680	6.95
合計		79	14	32	125	0.25	34	34	236	304	0.62	1446	1220	2	2668	5.42
各比率%		63	11	26	100	—	11	11	78	100	—	54	45	1	100	—

註 北原は開拓組合に加入せるもののみとす

以上が概況であるが大中小家畜の有畜度にある均衡を保っている所と然らざる所があり、飛行場及飯島は大中小家畜を問わずすべてその價が大きくなっている。價は小さいながら大中小家畜が一つの均衡を持つている地區では木裏原、大徳原、片桐針ヶ平及北原等が見られ、北原を除き事業進度の良い地區である。その他の地區ではある種のものに偏している場合が多い。やはり有畜度も事業の進捗と表裏一体の関係にある事が示されている如くである。

4 肥料の状況(第30表参照)

これ等開拓地の土壤条件から見て肥料は生産増強上重要な要件である。現に本研究室では施肥の合理化をはかり開墾後3年目に於て馬鈴薯反當700貫を上げ既耕地標準の倍量を示し、他の作物もすべて標準以上になつている。しかし開拓地では資金難から配給肥料の購入がやつとであり、従つて自給肥料に重点がおかれているが不十分で合理的な施肥は望めない。

金肥 配給であるが過磷酸石灰が反當1貫匁づつ増配される他既耕地と同様である。これはこの地帯の開拓地では合理的であるとは云えず寧ろ硫

安等の窒素肥料を少し減じて過磷酸石灰を窒素肥料と同量程度にすることが望ましいのである。石灰は一部タンカルが現物融資の形で配當されているが充分でなく農業協同組合の斡旋で石灰も購入している。しかしこれも必要量に比し極くわずかで反當施用量は7~8貫であつて土壤酸度の緩和は容易なものでない。最高は集團地では木裏原、小團地では飯島其の他4ヶ所の10貫程度である。一般には南部小團地の方が多い傾向にある。

自給肥料 大家畜の飼育が少ないので堆肥が中心であり、落葉、採草地及未墾地の草を材料にしている。原料の充分得られる所例えば場廣、キグタシ、飯島三林及大源田等はよいとして一般には材料が不足で時には山に入り盗採することもある由であり、充分施用することは出来ない状況である。従つて反當100貫匁程度であつてこの地帯としては不充分である。特殊なのは飛行場であつて伊那町と塵埃處理の契約を結び之を土壤改良に使用する一方人糞尿取扱をして相當量入手している。

要するに開拓地では土壤条件に比して肥料事情は極めて悪く、従つて生産の向上も大きく阻害されていると云い得る。

第30表 石灰及堆肥の施用状況

地 區 名	現在採草 地充當		既 墾 地 青刈面積	年 平 均 石灰施用 量反當量	年 平 均 堆 肥施用 量反當量	備 考
	總面積	1戸當				
集 團	一ノ宮	47.0	0.81	0	7	40~50
	大芝原	17.0	0.57	0	8	50~60
	上溝原	135.0	1.53	1.0	5	100
	南原	55.0	1.25	0.5	8	150
	小黑原	84.0	1.65	1.6	5	50
						未墾地を採草地に充しているが不充分 切株と交換に既存部落から糞等を入れ堆肥の原料とする 採草地は今の所未墾地を利用するが不充分 採草地は今の所未墾地を利用しているが不充分 家畜を飼育するものは糞を購入する 目下未墾地を利用するが不充分

地	大 徳 原	50.4	1.80	0.9	8	150	堆肥 300メを目標としているが目標に到達しない 爲に重点使用する 敷草不足の爲山よりとつてくる未墾地では不充分 集中的に反當400メ程度使用するが平均すると150 メとなる 敷草は自給している。伊那町塵埃處理引受 金肥は運搬が容易でないで現地で充分生産さる 堆肥を充分使用させる 23年始めて使用する平均すれば百貫となる 原料 は充分
	木 裏 原	11.5	0.22	3.0	10	150	
	飛 行 場	1.0	0.10	6.0	5	100	
	場 廣	41.8	2.46	0	5	300	
	キグタシ	30.5	2.17	0.5	7	100	
小 團 地	北 原	0	0	2.0	5	100	畦畔の草及穀物がらを堆肥とす 陸稻は重点使用する平均すればこの位の原料の入 手は困難である 採草地は充分であるから堆肥の生産は事かかない 採草地はあまり活用されていない 未墾地から不充分ながら材料を得ている 村有の採草地及薪炭材は利用が許されているので 材料は不充分ながら入手出来る 堆肥の材料にめぐまれている まぐ側の村有林の利用を許されているので材料は 入手が容易である 材料不足
	中 ノ 原	3.0	0.3	0	5~6	50	
	飯 島	13.7	1.25	0.2	10	300	
	七 久 保	19.5	1.77	0	5	50	
	針ヶ平(七)	7.2	0.55	0	5	100	
	" (片)	2.2	0.12	0	10	100	
	三 林	13.0	3.60	0	10	200	
	大 源 田	0	0	0	10	200	
地	柳 澤	7.3	0.9	0	10	50	

組合長を中心に若干の人々より聴取せるもので施用量には主観及憶測が入つているものと思われる

5 作物栽培の状況 (第31~36表参照)

開拓地の初期に於ける作物栽培は土壤條件に強く制約されるからして作物の導入及栽培方法をよく考慮して合理的に行うことが事業を促進する原因にもなるのである。しかし調査の結果は遺憾ながら特に考慮をはらわれた点は見出せなかつた。

栽培方法も特殊なものは見られず周囲の既耕地に準じてすべてが行われて居り、導入作物にしても全く変りなかつたのである。

i 作物の導入状況 開拓地に於て先づ目標となることは食料自給であつて作物も主要食糧とな

るものが中心となつて居る。一例に昭和23年度の作付作物を示すと第31表の如く、大豆、馬鈴薯、甘藷及粟は全地區に、陸稻、ライ麦、小麥、大根及蕎麥は1~2ヶ所を除き栽培されて居り、其の他では大麥、小豆及青刈飼料が中心である。蔬菜も各地區に栽培されているがその面積は極めて少く自給用であり又土壤條件からして収穫は殆んど上つて居ない。又水稻は地區内で栽培出来る所は殆んどなく、僅か場廣、キグタシ及飯島に夫々1反歩以下あるだけで問題にはならない。然し米食に對する慾求は強く開拓を計畫している地區もある。

第31表 昭和23年度主要作物作付反別 (地區別)

地 區 名	陸稻	ライ麦	小麥	大麥	粟	大豆	小豆	甘藷	馬鈴薯	蕎麥	大根	青刈飼料	其他	計
集 團 地	一 ノ 宮	10.0	6.0	1.0	0	5.0	5.0	3.0	3.0	1.0	2.0	3.0	0 0.5	39.5
	大 芝 原	0.6	5.0	1.0	0.5	1.0	3.0	1.0	0.6	1.0	0.5	0.7	0 0.5	15.4
	上 溝 原	4.0	14.0	3.0	0.5	5.0	12.0	0	0.4	0.5	2.0	0.5	0 2.0	43.9
	南 原	0.5	5.0	3.0	0	2.0	9.0	0	3.0	1.0	2.0	0.2	0.5 0.2	22.4
	小 黒 原	1.9	6.0	1.0	0	5.4	8.4	0	3.1	3.5	0.8	0.8	1.6 2.0	34.5
	大 徳 原	1.5	4.5	4.5	1.0	4.5	5.0	0	2.5	2.5	4.5	2.0	0 0.2	32.7
	木 裏 原	4.0	7.5	1.5	1.0	7.0	10.0	0	5.0	5.0	3.0	2.5	3.0 2.0	51.8
	飛 行 場	0	1.0	2.0	0.5	2.0	4.0	1.0	0.7	0.7	2.8	0.2	6.0 4.0	24.9
	場 廣	0.1	2.0	0.1	0	1.0	1.5	0.5	0.5	2.0	0	0.5	0 0.8	9.0
	キグタシ	0	1.0	0.5	0	0.7	1.4	0.7	0.7	1.4	0.7	0	0.5 0.3	7.9
小 計		22.6	52.0	17.6	3.5	33.6	55.3	6.2	19.5	18.6	18.3	10.4	11.6 12.5	281.7
小	北 原	1.5	1.0	0	0	0.5	1.5	0	0.5	0.5	0.3	0	2.0 0.2	8.0
	中 ノ 原	0.5	1.5	0.5	0	0.4	1.0	0.3	1.0	1.0	0.2	1.0	1.0 0.1	8.5

團 地	飯 島	1.0	1.0	3.0	0.5	1.5	2.0	0	1.0	2.2	1.5	1.0	0.9	1.0	16.6
	七 久 保	0.3	0.5	0.1	0	0.2	0.3	0	0.2	0.2	0.4	0.1	0.2	0.1	2.6
	針ヶ平(七)	1.0	0.4	0.1	0	0.3	0.6	0	0.5	0.4	0.3	0.3	0	0.1	4.0
	〃 (片)	2.0	0.4	1.8	0	0.8	1.8	0	1.8	1.1	1.6	0.5	0	2.2	14.1
	三 林	0.3	0.5	0.1	0	0.2	0.3	0.1	0.2	0.2	0.5	0.1	0	0.1	2.5
	大 源 田	0.2	0.3	0.7	0	0.1	0.7	0	0.5	0.4	1.0	0.1	0	0.2	4.2
	柳 澤	0	0	0.4	0	0.2	0.2	0.1	0.3	0.2	0	0.1	0	0.1	2.6
小 計		6.8	5.6	6.7	0.5	4.2	8.4	0.5	6.0	6.2	5.8	3.2	4.1	4.1	62.1
合 計		29.4	57.6	24.3	4.0	37.8	63.7	6.7	25.5	24.8	24.1	13.6	15.7	16.6	343.8

導入された作物は總計すると53種に上り週邊地區で栽培されているものを總べて含んでいる。しかし栽培に成功したものは少なく、土壤條件を忘却した結果からして勞苦を無にしている場合の多いことは一考を要する点であり、この方面の積極的な指導が望まれる。

各調査地で各作物に就いて生育の現況を聴出し

これに基いて合理的と思われる導入順序を推定して見ると第32表の如くなる。土壤條件及肥料事情を見ても蔬菜以外は大体妥當と思われるが、蔬菜には大根を除き疑問があり他の作物より相當多く肥料を入れた場合と思われる。しかしこの表は強い酸性磷酸欠と云う土壤條件と肥料が充分ないと云う二つの前提に立つものである。

第32表 作物導入の合理的推定序列

作物種	1年目より	2年目より	3年目より	4年目より	資料不足で判定出来ないもの	不適當
禾穀類及蕎麥	ライ麥 粟 蕎麥	陸稻 小麥 燕麥 黍 稗	玉蜀黍	大麥 高粱		
豆 類	大豆	小豆	菜豆 ささげ	豌豆 落花生(小粒)		落花生大粒
諸 類	薯蕷	甘藷 馬鈴薯 里芋				
蔬 菜 類	大根 葱 ゆうがを	茄子 南瓜 胡瓜 蕃茄	越瓜 甜瓜 人蔘 牛蒡 白菜 甘藍 漬菜 西瓜	波稜草	葱頭	
工 藝 作物	胡麻 エゴマ		大麻 菜種	蘆粟	甜菜 薄荷 除虫菊	棉
飼 料 作物	菊芋	ベツチ	紫雲英 苜蓿			
	13種	13種	14種	6種	4種	2種

第33表 導入されている主要作物の主な品種

作物	品 種
陸 稻	東海13號 最上糯 近成純1號 農林糯13號
ラ イ 麥	不 明
小 麥	農林27號 同39號 同66號 伊賀筑後オレゴン
大 麥	白麥 倍取 合系46號 備前早生細麥
粟	在來種
大 豆	赤莢 銀白 兄 日蔭不知 大鹿大豆 不作不知 在來種
小 豆	中納豆 盆小豆(在來)
甘 藷	護國 石川4號 沖繩100號 關東13號 岩手 飯郷 農林5號
馬 鈴 薯	男爵 紅丸 アーリローズ
蕎 麥	在來種
大 根	宮重 地大根(赤筋)

尙主要作物については導入されている品種を見ると等33表の如くであり、獎勵品種以外のものの

相當多いことは一考を要すると思う。

ii 栽培作物の変遷 調査時期の關係から栽培作物の大きな変遷は見られず三年間を通じてライ麦、大豆及粟が夫々全面積の割以上を示している。各作物の年次別の變化を作付反別から判定すると(第34表)米食への慾求から陸稻が逐次増加

を示しているのがよくわかる。ライ麦、粟及蕎麥の如く不良條件に強く開墾初期に多いものは逐次土壤條件の改善に伴い漸減の傾向に示し、經濟的に有利な小豆、及大根等が漸増の傾向を示している。

第34表 主要作物年次別作付反別

年次別	陸稻	ライ麦	小麦	大麦	粟	大豆	小豆	甘藷	馬鈴薯	蕎麥	大根	青刈飼料	其他	計
初年目	實面積 町	5.0	23.5	4.5	0.7	18.3	19.4	0.1	9.4	9.7	11.0	1.9	0	116.0
	比率 %	4.3	20.3	3.9	0.6	15.8	16.7	0.1	8.1	6.7	9.6	1.6	0	100.0
二年目	實面積 町	12.7	37.7	16.2	3.1	23.2	44.1	1.2	26.0	19.5	20.1	7.5	3.2	230.8
	比率 %	5.5	16.3	7.0	1.3	12.2	19.1	0.5	11.3	8.5	8.7	3.3	1.4	100.0
三年目	實面積 町	26.2	52.1	17.1	3.5	33.0	55.7	6.6	22.3	21.8	19.2	11.3	16.0	300.0
	比率 %	8.7	17.3	5.7	1.2	11.0	18.6	2.2	7.4	7.3	6.4	3.8	5.3	100.0

又家畜の導入と共に青刈飼料が増加しているのも當然である。大小麦については未だ土壤條件に制約されているものと見てよく、大豆、甘藷及馬鈴薯の殆んど移動の傾向が見られないのはこれらは經濟的の價值もあるからである。尙これ以外のものは蔬菜その他であるが、第一年目には12.3%を占めているが第二及三年目に激減しているのは一年目の失敗によるものと見てよいのではなからうか。要するに栽培作物は當初は土壤條件に支配

され次の段階には經濟條件に支配されて變遷するものと考えてよい。

尙その他果樹が導入されて來ている。桃、林檎、梨、栗、柿及胡桃であるが、これは將來を考えての導入でである。

iii 反當收當について これは果して正確な解答を得たか否かと云う点に既に疑問がないではないが、そう大きな間違のある數字ではないと思われるので示して見ることにした。

第35表 昭和23年度主要作物反當收量

地 區 名	陸稻	ライ麦	小麦	大麦	粟	大豆	小豆	甘藷	馬鈴薯	蕎麥	大 根
集 團											
一ノ宮	8.0	10.0	—	—	6.0	6.0	2.0	300	70	3.0	800
大芝原	8.6	6.0	3.0	—	6.0	4.0	1.0	150	300	3.0	300
上溝原	3.0	6.0	4.0	3.0	4.0	3.0	—	100	200	2.0	100
南原	6.0	8.0	—	—	5.0	6.0	—	150	150	6.0	1000
小黒原	4.0	8.0	4.0	5.0	4.0	4.0	—	80	100	8.0	400
大徳原	12.0	4.0	4.0	1.0	8.0	4.0	—	200	200	8.0	1000
木裏原	5.0	10.0	3.0	3.0	8.0	4.0	—	150	150	3.0	300
飛行場	—	6.5	6.5	6.5	7.0	4.0	4.0	100	100	7.0	800
場 廣	1.0	10.0	—	—	5.0	6.0	6.0	100	150	—	100
キグタシ	8.0	24.0	—	—	16.0	12.0	12.0	300	200	5.0	—
平 均	6.11	9.25	4.08	3.70	6.90	5.30	5.00	163.0	162.0	5.00	533.3
小 團											
北 原	4.0	5.0	—	—	5.0	4.0	—	100	100	5.0	500
中ノ原	3.5	6.0	—	—	5.0	8.0	2.0	80	100	2.0	150
飯 員	8.0	15.0	8.0	14.0	8.0	15.0	—	250	250	8.0	600
七久保	4.0	11.0	—	—	2.5	8.0	—	100	250	3.0	600
針ヶ平(七)	4.5	10.0	10.0	—	5.0	3.0	—	250	90	5.0	300
" (片)	6.0	3.0	—	—	2.0	6.0	—	150	100	2.0	300
三 林	8.0	2.0	—	—	8.0	5.4	2.5	80	120	2.0	1050

地	大 源 田	10.0	12.0	4.0	—	8.0	5.0		150	200	7.0	800
	柳 澤	—	—	—	—	2.0	1.5	1.0	120	100	—	800
平	均	6.00	8.00	7.33	14.00	5.05	6.21	1.83	142.2	156.6	4.25	566.6
總	平 均	6.06	8.69	5.17	5.41	6.03	5.73	3.81	153.1	159.5	4.65	550.3
近 隣 地 の	量	12.0	13.5	12.0	20.0	12.0	12.0	10.0			15.0	
標 準 收		16.0	16.0	16.0	24.0	16.0	16.0	13.0	350	350	20.0	1000

昭和23年大休3年目の各地區に於ける主要作物の反當收量は第35表に示す通りで平均すると大根甘藷、馬鈴薯及ライ麥が週邊既耕地の約半はでそれ以外は問題にならない。勿論地區的には相當差異があり、総合的に飛行場、木裏原、大徳原、キグタシ、飯島、七久保針ヶ平及大源田は比較的

收量が高い方である。

又年次別に見ると(第36表)やはり當然の事ではあるが、年次が進むにつれて收量が増加することが明かに見られるが、その増加度は至つて緩慢である。

第36表 作付年次別主要作物反當收量(地區平均)

作 付 年 次	陸稻	ライ麥	小麥	大麥	粟	大豆	小豆	甘藷	馬鈴薯	蕎麥	大根
一 年 目	3.6	7.4	3.7	5.3	4.5	2.5	5.0 ⁽¹⁾	61	76	4.3	320
二 年 目	4.5	8.4	3.4 ⁽²⁾	4.8 ⁽²⁾	4.3	4.1	3.0	108	126	3.3	430
三 年 目	5.2	8.0 ⁽³⁾	7.0 ⁽³⁾	3.0 ⁽³⁾	5.7	5.1	5.7	138	126	4.0	508

(1) は飯島地區のみ (2) は最も收量の高い飯島地區が入っていない爲

(3) は上溝原及七久保針ヶ平の兩地區のみ

要するに反當收量は一般に問題にならない程低く、年々増加をするもののその度は緩慢であり、従つて農産物は自給するに精一杯であつてこれから生活を維持する現金収入が得られるとは考えられない。しかし收量は合理的な栽培法を考えることによりもつと速かに増加することが本校圃場でも認められて居り、開拓者のこの点に関する認識と指導者側の積極的な指導があればこの点はある程度まで解決出来るのである。

6 地區外における水田耕作(第37表参照)

開拓者で地區外に於て水田耕作をしているものがあるが自己の所有地を有するものは極く僅かであつて多くは生活又は縁故者名儀で耕作し保有米を得ているものである。地區によつて差があるが個人の生活上は有利であることは間違いないが、全般的に見て事業進展を促進しているとは思えずその數によつては逆つて入植の協力が亂れ開拓地の建設から云えば阻害作用を呈する場合があるのではないかと思う。これは地元縁故者の多い所の特徴であり、入植と云う点から云えば例外に考える方がよい様である。

第37表 地區外水田耕作の状況

地 區 名	戸 數	反 別	年間保有する者	摘 要	対入植者比率
一ノ宮	2	5.0	2	開拓者の所有地	3.6
大芝原	10	15.0	0		33.3
上溝原	0	0	0		0
南原	15	20.0	5		34.1
小黒原	5	10.0	2		9.8
大徳原	0	0	0		0
木裏原	3	6.0	0	將來1戸2反宛の開田を計画する	10.7
飛行場	0	0	0		0
廣	0	0	0		0
キグタシ	3	6.0	0		21.4
小 計	38	62.0	9		9.7
北原	7	14.0	3	この内5戸は開拓者の所有地	50.0
中ノ原	0	0	0		0
飯島	3	5.4	3	24年度に1戸當1反を開田する	27.2
七久保	4	8.0	0	將來開田計画あり	36.3
針ヶ平(七)	0	0	0		0
〃(片)	4	4.0	1		22.2
三林	0	0	0	將來1戸當2反の借地を計画す	0
大源田	1	1.5	0		12.5
柳澤	2	4.0	1	開拓者の所有地	25.0
小 計	21	36.9	8		18.9
合 計	59	98.9	17		11.8

7 供出の状況

開拓地は原則として3年間の供出を免除されているから現在供出を行つてゐる所は殆んどない。飛行場は23年は大豆及雜穀29俵、麥30俵を開拓地として最初の自發供出を行つた。木裏原は23年より村の供出對象となり一應供出して配給を受けてゐる。事業開始3年目となつたものは23年の麥作から供出の對象となつたが生産割當は極めて低くなつてゐる。

8 他部落との關係

どの地區共に大した磨擦なく大体うまく行つてゐる。これは入植者に地元縁故者の多いことが好影響を與えてゐると見られる。飯島に於ては地元者の理解と精神的及物質的援助が極めて大であることが目立つて居る。外には取上げて云う所はない。

9 生活に必要な現金の手入手段 (第38表参照)

開拓地の一人一ヶ月當の支出は主食が最低500圓(勞務者加配がある)で雜費を入れて700~1500

圓程度になつてゐる。以上述べて來た如き諸状況ではこれだけの現金は到底得られないことは明かである。農産物販賣代金はこの極く一部にしか當らない。そこで入植者は如何にして生活に必要な現金を得てゐるのであろうかと云うと第38表の通りである。即ち營農資金及開墾補助金の流用、出稼及副業等が中心である。賃勞は農繁期の手傳農閑期の山林伐採及土木事業、炭焼の手傳、其の外他地方へ出稼である。この爲開墾が非常に遅れ勝になる。副業は開墾を遅さない如く出稼を止めて行つてゐるもので冬期間を利用し製炭、竹細工、薬細工、袋貼り及ブローカー等がある。又一般に共通的現象は家族の多いものは誰かが勤めに出て經常的な収入をはかつてゐることである。

農業として軌道に乗り農産物の販賣代金で大体生活を維持し得るのは未だ飛行場と飯島の二ヶ所にすぎない。要するにこの二ヶ所を除いては未だ建設が順調に進んでゐないことを意味するものと見てよい。

第38表 各地區の生活資金の入手手段 (○は主要なるもの)

地 區 名	營農資金	開 墾 補助金	賃 勞 働	副 業	農 産 物 販賣代金	そ の 他
集 團 地	一ノ宮	○	○	○(作男・山林の伐採)	極く一部	配給米をヤミ賣して雜穀を食い差額を得る
	大芝原	○	○	○(冬期約半數出稼)	極く一部	
	上溝原	○	○	○(冬期大部分が出稼)	極く一部	
	南原		○	○(冬期は出ない)	一部	
	小黒原		○	○(約半數は出る)	一部	
	大徳原	○	○	○	極く一部	
	木裏原		○	○(平均月10~15日)	一部	
	飛行場	一部			○	
小 團 地	場廣	○	○	○(約半數・生家から出稼)	一部冬期製炭	手持金 借 金 賣り食い 勤人となる
	キグタシ	一部	一部	○製炭	殆んどなし	
	北原	○	○	一部	一部	
	中ノ原	○	○	○	殆んどなし	
	飯島			○ホーキ加工 炭俵加工	○	
	七久保	○	○		殆んどなし	
	針ヶ平(七)	○	○		殆んどなし	
	〃(片)	○	○		一部	
地	三林		○	○竹細工 屋根板	一部	
	大源田		○	○果樹の袋貼 薬細工	極く一部	
	柳沢	○	○	○ブローカー	殆んどなし	

10 營農の進度と諸状況 (第39表参照)

久保佐土美氏(開拓地の農業経営)によると開拓地の農業経営を、

(1) 未だ経営の獨立を見ない出作の時代又は自

給食糧さえ生産し得ない時代

(2) 辛じて自給食糧の生産は出来る如くなつたがまだ経営實力はなく、賃勞、出稼等で補足しなければならぬ時代

(3) 農業経営が漸く成立するに至つた時代
の三段階に分類している。前項に述べた生活資金の入手手段より考察して調査地區を之によつて分類すると第39表の判定の如くなる。但し(3)を上, (2)を中上, 中, 中下に分け, (1)を下とした之と他の状況との関係を見ると大多數の点に於て平行的関係にあることがわかる。即ち土地利用とはあまり関係が見出せないが収量との関係は小園地に於て明であり, 又自給肥料事業との関係も大体明かになつて居り, これは土地の瘦肥又土壤改良の進度に關係があることを示す。農具の導入度の關係も明かで又畜力耕耘機具の導入も明かに平

行關係にある。又有畜度も然りである。これ等は農具導入又家畜の導入が営農の進展と表裏一体の關係にあることを示すものである。又これ等は資金及其使用法に歸一出來ると考えられ, 資金が豊富であるか, 又資金の一切を共同使用し効率を高める等のことが営農を進展さす爲に必須の條件となると云えよう。自給肥料事情等もこれから見れば資金の節約と大きな關係があるのである。

尙営農の進展に關係する要件は多種多様であることは云うまでもないが, 此處ではこれ等の問題には觸れないで置く。

第39表 営農進度と諸状況

分類	営農進度	地區名			土地利用度	収量	自給肥料事情	有畜度			大農具 納入度	大農具 共有度	畜力 耕耘率	農産物 収入	資金・補助金 の流用度合
								大	中	小					
集團地	上	飛木	行裏	場原	高	普通	良	多	多	多	多	中	多	多い	僅か
	中上	南	黒原	原	低	稍低	普通	中	中	多	多	多	僅か	中	中
	中	小	黒原	原	低	稍低	悪	中	少	中	中	無	中	中	中
	中	太	グ	タ	高	稍高	普通	中	少	多	少	中	中	中	多
	中下	上	溝	原	高	高	良	中	少	少	少	全	無	極く僅か	多
	中	大	芝	原	高	普通	悪	中	中	中	中	少	無	中	中
	下	一	ノ	宮	高	普通	悪	中	中	中	中	中	中	中	多
	中	場	廣	廣	普通	低	良	中	中	中	中	全	中	殆んどなし	中
小園地	上	飯	島	高	高	良	多	多	多	多	多	中	多い	僅か	中
	中下	片桐	針ヶ	平	低	普通	普通	中	中	中	中	中	僅か	中	中
	中	大	源	田	中	中	良	中	多	中	中	多	中	中	中
	中	三	林	原	普通	中	中	中	少	少	全	無	極く僅か	中	中
	下	北	ノ	原	中	低	悪	中	中	多	多	無	僅か	中	中
	中	中	久	保	高	稍低	中	中	少	少	多	無	殆んどなし	中	中
	中	七	久	保	中	普通	中	中	中	中	中	無	中	中	中
	中	七	久	保	中	普通	中	中	中	中	中	無	中	中	中

Ⅶ 各開拓地の將來の方針

調査した開拓地の現況は以上述べて來た様に一般にその事業の進捗は遅々として食糧の自給に迫れているのであるが, 一應組合として將來の方針が検討されている様である。聽出した所を要約すると次の如くである。尙それ等は食糧の自給の後の方針である。

一ノ宮 酪農及簡単な農産加工に重点を置く計畫である。防風林10町歩を設定, 栗を植栽し耕地

の生産増強と副収入で考慮する。

大芝原 現在の所どうしてよいか解らない。

上溝原 中小家畜(豚, 雞)に重点を置き一部果樹(栗, 林檎)及蔬菜を導入する。又木工機を導入し工藝品及竹細工を副業として考へている。

南原 農畜産物の加工に重点を置き, 一部養蠶を行う。副業として製炭, 薪, 箒の製造及竹細工を行う。

小黑原 酪農に重点を置き, 一部伊那町市場を目的とした蔬菜を導入する。3戸に一組の畜力農

具を導入し共同作業を推進したい。

大徳原 畜産を中心に置く。副業として瓦の製造を行う。

木裏原 果樹（林檎、桃、胡桃、柿）と養蠶を主体として行く。

飛行場 高度に有畜化し、作物は工藝作物を主体とする。又加工を考えているがこの場合は週邊部落の既存農家を合体し徹底した高度の加工を行いたい。尙この地區の理想は全地區共同経営を行うことであり、既に土地分割は之を考慮して行つてある。

場廣 農畜林混合経営を行う。

キグタシ 共同加工（凍豆腐、干大根、澱粉）を中心に養雞及果樹（材檎、栗、胡桃）を配合して行く。副業としては製炭を行う。

北原 果樹（桃、栗、柿、林檎）に重点を置く。

中ノ原 養雞を中心に果樹（栗、林檎、葡萄、桃）を配合する。

飯島 この地區は分在して居りある時期には既存部葉へ吸収されるので、組合としての計畫はない。

七久保 具体的には考えていない。

七久保針ヶ平 果樹及養豚に重点を置き、蔬菜（トマト、ユリ、ラツキョー）を配合する。

片桐針ヶ平 既存部落と合体して澱粉工場を作り、その原料の芋類の栽培を中心とし、一部養雞と果樹（桃）を配合する。

三林 果樹（林檎、梨）と養畜（山羊、雞）を主体とする。

大源田 果樹（梨、桃、林檎）と養畜（細羊、豚、雞）を主体とする。

柳澤 果樹（林檎）を中心にする。

以上が大體食糧自給后の方針であるが、地區により夫々の立場又は見通しから計畫されて大體の傾向として養畜、果樹及加工と云うことが考えられて居り、別に新味はなく既設農村と同様な傾向にある。唯新設の地區であるからこの方針がどの程度徹底して實現されるかが將來興味ある点である。特にとり上げる所は飛行場でありコルホーズ式経営を目標して居り、その今後の動きは注目されてよい。又地區的な特徴を出しているのは場廣である。その他とり立てゝ述べる所はない。

Ⅸ 綜合考察

以上の如く上伊那郡下の各開拓地は略同一な條件より出發したのであるが、その進捗を見ると畧建設を完了したものからまだ緒についたばかりのものまで非常な差異が生じている。この差は何に起因するものであろうかと云うことが我々にとつて問題であり、又國家的立場から云つても阻害する因子を排除して速かに建設する方が得策であることは云うまでもないのである。これ等について若干考察して見たいと思うのである。

各章で判定した進捗をまとめて見ると第40表の如くなり、農業の本質上から営農進捗を指標としてこの表を見ると一見してすべてが畧平行關係にあることがわかる。一部開墾進捗との關係が不明瞭であるがこれは土地利用度空開墾その他が關係してくる爲と思われる。開拓地の農村建設進捗はそこに介在する諸條件の綜合により決定されるものであり、これ等が各様の影響を與へていることは當然である。そこでこれ等の進捗に最も大きな影響を與えているものを抽出すれば開拓農村の建設を促進する要件をとらえることが出来る。これについて二三述べて見る。開拓事業を促進する要因としては開拓者又は開拓地に存在するもの云わば内因と外因に在するもの（例えば援助の如き）云わば外因とがある。こゝでは先づ内因について主に述べ後に外因について私見を附記して見たいと思う。内因については次の如きものは事業進展上最も大きいものと考えられる。

(1) 資金 (2) 共同 (3) 入植者の素質

(4) 採草地・薪炭林 (5) 用水 (6) 經濟立地
これ等の要件からうまく揃つた時開拓地は速かに發展するのである。この内經濟立地は重要なことであるが現開拓地は一般に最惡におかれているのが通例であるから検討は省略する。

資金 之はあらゆる事業の基礎であるから述べる必要もないが、集團地に比し小團地の進捗が遅れるのは國庫補助金の差であり資金重要さを明かに示している。開拓者の場合は手持資金が貧弱であるからして僅の差もはつきりと現われてくる様である。又資金に附隨して資金を効果的に使用することも当然事業に關係することは云うまでもない。解器材の共同購入が之であり、この例は木裏原、キグタシ及南原に見られる。又進んでいる所は営

農資金や補助金の流用が少なく、之を大部分建設面で充当している地區であることからしても資金の問題が如何に大きいかわかるのである。

共同 限られた資金及労力を使用して事業を遂行する爲にはその効率を高める程合理的であり従つて個別的に行うより共同で方う方が有利であることは云うまでもない。この共同の強弱は事業の進捗に最も大きな影響を與えたと云つてもよく建設が進んでいる地區ではすべて共同分野が大である。唯小黑原はこれが他に劣るがこれは土地配分にからんで問題があつたからであり、これがなければ当然飛行場近く程度に進んだと思われる。進度の遅れている上溝原、大芝原、一の宮及場廣では共同の弱いことが最大の原因である。又小團地の北原の如く開墾が完了しているに拘らず建設が一向進まないのは組合加入の農家が半数と云う現状にあるからで、土地買収さえも見通のつかない状態にある。斯の如く共同が必要であることが各地區の進捗状況より明かに示されるに拘らずなかなか行われず、一般には入植当初若干行われるだけで後は個別に事業を行う傾向が強いのである。

第40表 営農、開墾、入植及建設進度の総合比較

地 區 名	営農 進度 判定	開墾 進度 判定	入植 進度 判定	諸施設 建築進 度判定	經濟 立地 條件	自然 立地 條件
集 團 地	飛 行 場	上	完了	完了	良	上
	木 裏 原	中上	良好	良好	良好	中上
	南 原	中	可	良	〃	中上
	小 黒 原	〃	良	可	良	〃
	大 徳 原	〃	〃	良	〃	中
	キグタシ	〃	不可	〃	良	下
	上 溝 原	中下	〃	可	可	中
	大 芝 原	〃	良	〃	〃	中下
小 團 地	一ノ宮	下	可	不可	〃	中下
	場 廣	〃	不可	〃	不可	下
	飯 島	上	良	可	可	上
	針ヶ平(片)	中下	完了	良	〃	中下
	大 源 田	〃	良	完了	〃	中
	三 林	〃	可	〃	〃	〃
	北 原	下	完了	可	可	〃
	中 ノ 原	〃	良	不可	〃	〃
地	七 久 保	〃	不可	可	〃	〃
	針ヶ平(七)	〃	可	不可	不可	上
柳 沢	〃	〃	不可	〃	〃	中下
	〃	〃	〃	〃	〃	下

註 入植進度は入植率×現地居住率の良否で判定する
經濟立地は附近の消費を考へ差をつけて見た

入植者の素質 共同が一大要件ではあるが、共同が行われるか否かは入植者の考え方にかゝっている。従つて入植者の素質が問題となる。飛行場の成績優秀なのは之によるものであり、80%の未経験者を他の70%のものがうまく指導しているからである。各個人が同様の立場にあると云うことが共同の要件となつてゐる如く、これは上伊那郡にはないが旧開拓移居が集團入植している所の事業進捗は非常によいことから判定がつく。入植者各個人の經濟的條件の異つてゐること、又分家入植者の比較的多いことは共同を阻害する一つの因子であり、一ノ宮、大芝原、上溝原及場廣はこの好例である。この点から云えば地元に至々縁古のないものはどうしてもそこに住居を持たねばならぬから意慾も旺盛ならざるを得ないから開拓地はお互に交換して地元の入植者を極力なくした方が共同化が容易に行われ事業の進捗は促進されるかも知れない。

又農業経験者及農業に関する學歷を存するものの多いことは事業進捗と關係がある。一ノ宮、場廣、片桐針ヶ平及中ノ原は未経験者が多く進捗不良であり、飛行場は30%の未経験があり上記4地區に次ぐが70%が全く農業技術關係の前歴を持ち又農業に関する學歷も有することが促進因子となつてゐる。

要するに人的素質及構成は事業進捗上の一大要因となる。

採草地及薪炭林 この存在は資金の節約の要件となり副次的に作する。即ち金肥の購入が制限され世土壤の改良上堆肥を絶対必要とするからしてこの存在は誠に重要な要素になる、この影響は小團地に明かであり事業進捗のよい所は之に恵れた所のみである。

用水條件 用水は人間の生活の基本條件である上伊那郡下の開拓地の進捗があまり良好でないのもここに原因の一つがあり、之が現地居住率に關係し進捗を阻害しているのである。飯島の進捗のよいのは水に恵まれたことが一つの原因であり、又飛行場も條件は最悪であるが格納庫の屋根と云う所在のものを活用し雨水を集積利用出来たことがその進展を助長した大きな要因である。上溝原大芝原及一ノ宮の現地居住率の低いのは用水に原因があり、用水條件が事業進捗と關係していることを示している。

以上の外にも色々要因もあるがこの五項目が最も大きいと見受けられるのである。

外的因子としてはやはり色々あるが調査上表われたのは地元の援助である。しかし調査地を歩いて感じられることは相当あるのでこれをまとめて述べて行く。

開拓地の選定 開拓地は開拓適地基準によつて選定されているが之には生活條件が全々考えられていない。つまり耕地になり得ることが唯一の目的であつて、その地に居住する事又は農村が建設されることは考えられていない。耕地となり得ても人間の居住には適さない場所があることは当然であり、開拓地の選定には之が加味されなければならない。中でも用水の如きは最も重要であつてもしもこれが得られない場合は予めこれを解決する手段と見通を持つていることが大切である。これはやはり開拓事業を進展させる上の一つの要因である。

計畫 開拓計畫が一般に粗雑である。一貫した計畫をもつて遂行されたのは飛行場のみである。計畫は机上で作成され一戸当の予定面積及入植戸數と云うようなものが中心である。もう少し突つ込んだ開墾年次計畫とか防風林及採草地等の設置計畫が入植者の入植する前に現地に適合する如く立案されていて入植者が積極的に引ばられて行く位のこととされてよいと思う。とにかく入植させて耕地を開きさえすればよいと云う様な計畫だけでは開拓事業を速かに發展させることは困難である。

地元の理解 地元の理解と援助とは事業進捗に大きく影響を與える。飯島の進捗はこれに起因する所が甚だ多い。現實は逆に開墾豫定地に侵蝕しようとする動きが見られる所すらある。地元の縁故者の有無に拘らず地元民に開拓事業をよく理解させることが必要である。

指導の強化 開拓地に入植すれば一定の補助金と融資が形式的に出されているが積極的な指導は全々行われていない。共同作業に対する指導、設墾法又は作物の導入及栽培の合理化、輪作或は施設の建設等に関し積極的な指導は全々行われていないのである。これ等の指導が事業の進捗に重大な影響を與えることは云う迄もない。資金及補助金の使用にも別に関心が持たれていない。國家が一つの政策として取り上げ國家の資金で助成しているのであるから開拓地の實体をよく見て徹底的

な指導が行われてよい筈である。之が事業を促進し従つて國家にとつて有利であることは疑えないのである。この指導の不足分と云う点が進捗を阻害して居る一つの原因となつてゐる。

以上は外的因子と考えられるもので開拓地を歩いて痛切に感じた所である。

上伊那郡の各地區は要するに以上の條件に恵まれない爲に進捗が遅れているのであつて、このまゝ放置すれば開拓農村として健全な發展を見る地區は比較的少數に留り、他は解体され一部分が残り他は脱落し既存部落と合体する如くなるであろう。入植者が認識を改め、且指導者に人を得ればどうにか救われる道もある。今後の成行は興味ある問題と云えよう。

X 結 言

言を費やした割合に握み所のないものとなつたが、それは当初にも述べた如く結論を得る爲のものでないからである。今後續引きこれを參考にして個々の問題につき調査対象を整理して検討したいと思う次第である。

尙若干の私見を加えて結んで置き度いと思う。開拓事業要項にも新しい農村の開發となされているが果して開拓地に新しい農村が展設されつゝあつたであらうか。上伊那郡に限する限りでないと言つてもよく、唯飛行場のみが新鮮味ある農村へ進みつゝあるのみであつて他は旧農村の再現である。すべての点に於て旧態然として新味は何處にも見出されない。耕地分配等に於ては統合の最もよい機會に恵まれながら行われていない所が多いのは驚く外はない。現在農業経営の改善や生活改良が大いに叫ばれているがその標本となるべきものが開拓地に建設されるべきでこれが新農村の開發と考える。要項にある新農村も單にそこに旧態然の部落を一つ作ることを言つてゐるのではあるまい。こう考えると現在の如き形で開拓事業が行われている限り新農村の建設は無理である。少くも集團地は國家が事業主体となり積極的な施策を講じなければならない。事業当初に於て開墾を國家負擔で行い機械の導入が行われたのは望しいことであり、今後も少くも開墾は國家で機械を導入して全地區を速かに開墾し耕地の統合配分を容易ならしめ、且入植農家には一時に相当額を融資して住居の建築或家畜及農具の導入を速に行しめ

且各地に指導官の一人も配置して國家が最も理想とする如き農村を建設する如き努力が愆しいものである。既設農村の保守性は頑強であつて改善は容易に進むものではなく、一つのモデル農村を建設して實現の姿を見せることが最も妥當な方法である。之からしても開拓地に新しい農村を建設することが必要であり又國家としても開拓事業を速かに進捗させることは得策であるから、正に一舉兩得である。なにはともかく現在の如く融資と補助金の交付で放置して置くことは決して効果の上ることではないのである。

(昭和24年3月10日)

(文献省署)

附 記

発表が遅れた爲、現在すでに制度に改革を加へられてゐる所にも言及した点が相當あることを先ずおことはりしておく。又現在(昭和26年6月)の開墾地を見ると、當時と比べて興味ある変化を生じている。例へば比較的順調に進んでゐると思はれた所で方針を誤つた爲苦境に立つてゐる所(キグタシ)又開墾がおくれ地主攻勢に悩んでゐる所(上溝原)益々生活苦に迫れ融資の家畜、農具等を賣却し生活資金にあてた所。用水の解決がつかずどうにもならない所、等々で、文中に述べた將來計畫は何れの場所にも見出し得ない。

その反面、稍立直つた所も見出されるが、これ等の開拓地の大多數は決して順調な進展をとけて居らず、又反當收量も逆つて稍減少を示してゐる状態であり何かの手段が構ぜられなければこれ等の開拓地の將來は誠に暗い様に思はれるのである。(26.6.20)

正誤表

頁	表列	誤	正
1	標題	Natrium-fluoride	Natrium-fluoride
1	5	Referenth	Reference
1左	↓3	異る石	異石
1左	↓12	26.0	26°C
1右	↓18	Schizophyllum-Commune	Schizophyllum-commune
2右	↓3	0.2% 区	0.2% 区
5右	↑15	スエロダ、ロダ、カダ、カダ	スエロダ、カダ、カダ、カダ
6右	↑4	22.0	22°C
"	↑3	32.0	32°C
"	"	28.0	28°C
6右	↓1	0.1	0.1
6右	↑1	較へて	較へて僅
8左	↑14	井ノ子	井ノ子
8右	↓7	3巻 1号	3巻 1号
"	↓8	3巻 4号	3巻 4号
8右	↓9	Wood-pres. A	Wood-pres. A
8右	↓15	investigations	investigations
10右	↓11	ZILVA	ZILVA
11右	↓3	"	"
"	↓15	GREGOR	GREGOR
"	↑11	tomatoes	tomatoes
13左	↓13	農業経営	農業経営学
"	↓5	源泉体	源泉体
14左	↑17	現象	現象
16左	↓4	号 枝	号 枝
20	2回	水 通	水 通
21右	↑148	"	"
22左	↓313	mentol	menthol
22右	↓5	"	"
21右	↑4.5	"	"
22左	↓2	mention	menthone
21右	↑1	上部より	上部より
22左	↑15	量 雨	雨 量
23右	↓4	茶への水	茶への水
26左	↑1	非文	非文
28右	↑4.5	平地林	平地林
29	4表	"	単位は町尺

頁	表列	誤	正
29左	↑1.68	"	"
30左	↑7	大 源 田	大 源 田
31	36表	針ヶ原	針ヶ原
33左	↑15	大 源 田	大 源 田
"	↑16	中 の 原	中 の 原
34左	↓45	"	"
37左	↓6	大 源 田	大 源 田
37右	↓10	非 當	非 當
39右	↑7	オ一年月	オ一年次
41左	↑6	関 係	関 係
42左	↓6	"	"
44右	↑10	大 源 田	大 源 田
"	↑11	雨針ヶ平地区	雨針ヶ平地区
45右	↓17	太 体	大 体
48左	↑12	耕転用具	耕作用具
48右	↓5	大 源 田	大 源 田
50左	↓4	上 灌 原	上 灌 原
50左	↓2	上 源 田	大 源 田
54左	↑10	大 源 田	大 源 田
54右	↑10	大 源 田	大 源 田
53	33表	含系4号	含系46号
54右	↑4	瓦当牧場	瓦当牧場
57左	↓9	肥料手帳	肥料手帳
58左	↑13	大 源 田	大 源 田
59左	↓13	一の百	一の百
"	↓15	實 3	完 3
"	↓15	制限と世	制限と世
60左	↑10	すれは	すれは
"	↑8.9	設 置 法	南 置 法
27	31	"	"
"	7-10	"	"
"	12-14	"	"
"	16-20	"	"
"	22-31	"	"
"	35-38	"	"
57	39表	"	"
29	4表	上 源 田	大 源 田
27	31表	大 源 田	大 源 田